

VI 帆立貝古墳論(上)―帆立貝古墳の定義―

1. はじめに

1) あいまいな概念規定

円墳状の主丘部に、造出または短小な前方部とみなされる突出部を付設する一群の古墳を、漠然と帆立貝式古墳（または帆立貝形古墳）と総称するのは今日でも一般によく行われる呼称法といえる。造出付円墳をも含む総称として用いられることが多く、当面そのような広い範囲の古墳を指す場合は「帆立貝式古墳」として論をすすめる。

本章では、造出付円墳あるいは前方部の短い前方後円墳などとは別個の、そのどちらにも属さない独自の墳形としての「狭義の帆立貝式古墳」が存在することをこれから論証していく。狭義の帆立貝式古墳の呼称の問題についてはあとで検討する。

帆立貝古墳に関して近年積極的に発言しているのは遊佐和敏、櫃本誠一の両氏で、ともに帆立貝式古墳は「帆立貝式（形）前方後円墳」と「造出付円墳」の2種の異なる墳形に区分されるという点で見解は異ならないようである。

遊佐和敏の区分案 2つの墳形の区分基準に関して遊佐は、突出部の高さについては、帆立貝式前方後円墳の「前方部」は後円部の3分の1以上、造出付円墳の「造出」は円丘部の3分の1以下と数値的に明確に区分しているが、突出部の長さについては、前者が「後円部直径の2分の1を上限とすること」、後者は「円丘部直径の2分の1以下であること」と、事実上、区分基準を示していない。

一方で、『短小な前方部』や『造り出し』の高さ、あるいは長さの一方の基準が当てはまらない場合でも、他方の基準を重視したり、他の要素を加味することによって、正しい判定が可能である」とも述べ、前方部または造出における埋葬の有無や埴輪の存在状況、周溝の形態などをも加味して判断すべきという（遊佐 1988 : P28, 30）。総合的判断による区分法といえようが、墳形区分に際して最も重要な平面形に関し、前方部と造出の区分基準を明確に提示することなく行われる「総合的」判定は、ややもすれば主観的、恣意的なものに陥りかねない。

櫃本誠一の案 櫃本は、両者の区分については明確でないとしながら、前方部長が後円部径の1/3、幅が1/2程度の一群と、同じく長さ1/5以下、幅1/2以下程度の一群との2者が存するとして、前者を「前方後円形の帆立貝形古墳」、後者を「円墳に造り出しが付設された形態」と区分する見解を示した（櫃本 1984 : P59～63）。ただし、図示された各比率の分布図からは、そのようなグルーピングを可能とするような分布のかたよりや境界線があるようには見うけられない。

氏はまた、同一古墳に複数の突出部がつく帆立貝式古墳を取りあげ、大きい方を前方部、小さい方を造出とする一応常識的な判断を示したが、両者を区分する基準は示されず、突出部が一つだけの古墳について、それが前方部なのか造出なのかを判断できる客観的基準は提示されていない（櫃本 2000 : P73）。

石部ら4氏の案 上記2氏に対し、石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一の4氏は、後円部直径の8分の1の長さ（8等分値）を古墳築造企画における基準単位とする独自の企画論に立脚して、基準単位の区数で突出部長を把握し、突出部5区型から8区型を定型的な前方後円墳、1区型から4区型までを帆立貝形古墳と捉えた。そして、その中でも1区型と2区型が帆立貝形の名称にふさわしい古墳

と表現した(石部ほか1980:P85-102)。

後円部直径の8等分値という一定の明確なスケールを用い、その単位数で突出部長を数量化して表示し、墳丘形態の特徴を客観的に比較しようとする4氏の方法は正統なものであり、それまでの帆立貝式古墳の形態論とは一線を画すものと評価できる。

ただし、後円部直径8等分値というスケールは、この種の古墳の形態を理解するためには粗すぎ、突出部の長さが8等分値1区に満たない古墳などの形態把握には機能しないという限界をもつ。また、円丘系の主丘部直径を方格図によって把握するという致命的に欠陥のある方法に依拠しているため、主丘部直径の把握がほとんどの場合不正確であり、そこから割り出された8等分値およびその値による区数の捉え方も正確ではない¹⁾。

奈良県乙女山古墳は4氏によれば2区型である。筆者は、古墳築造企画の基準単位は主丘部直径または一辺の24等分値であることを明らかにしてきた。8等分値1区は24等分値3単位であるから、乙女山古墳の突出部長2区は6単位となるが、あとで図を示して説明するように筆者の検討では4単位であり、4氏の把握とは相違する。筆者の検討結果では、24等分値4単位のほか、1単位、2単位、8単位など、8等分値の区数では整数値にならない古墳が多く認められ、4氏の把握とは異なる結果が得られている。

2) 既往諸説への疑問

石部ら4氏の論で、1区型から8区型まで1区きざみに等間隔でならぶ前方後円墳の8つの「類型」の中で、4区と5区の間、帆立貝式古墳と定型的前方後円墳の境界がなぜ引けるのか、合理的な説明のない点も疑問点として指摘される。遊佐、櫃本の所説にも同様の疑問点、すなわち前方部長が後円部直径の1/2あるいは1/3以下になるとなぜ通常的前方後円墳とは異なる墳形として区分されるのか、納得のいく説明は行われていない。

既往の諸説には帆立貝式古墳そのものの範囲に関する規定のあいまいさが指摘できるといってよい。帆立貝式古墳の分類以前に、帆立貝式古墳と前方後円墳の区分基準、概念規定を明確にする必要がある。

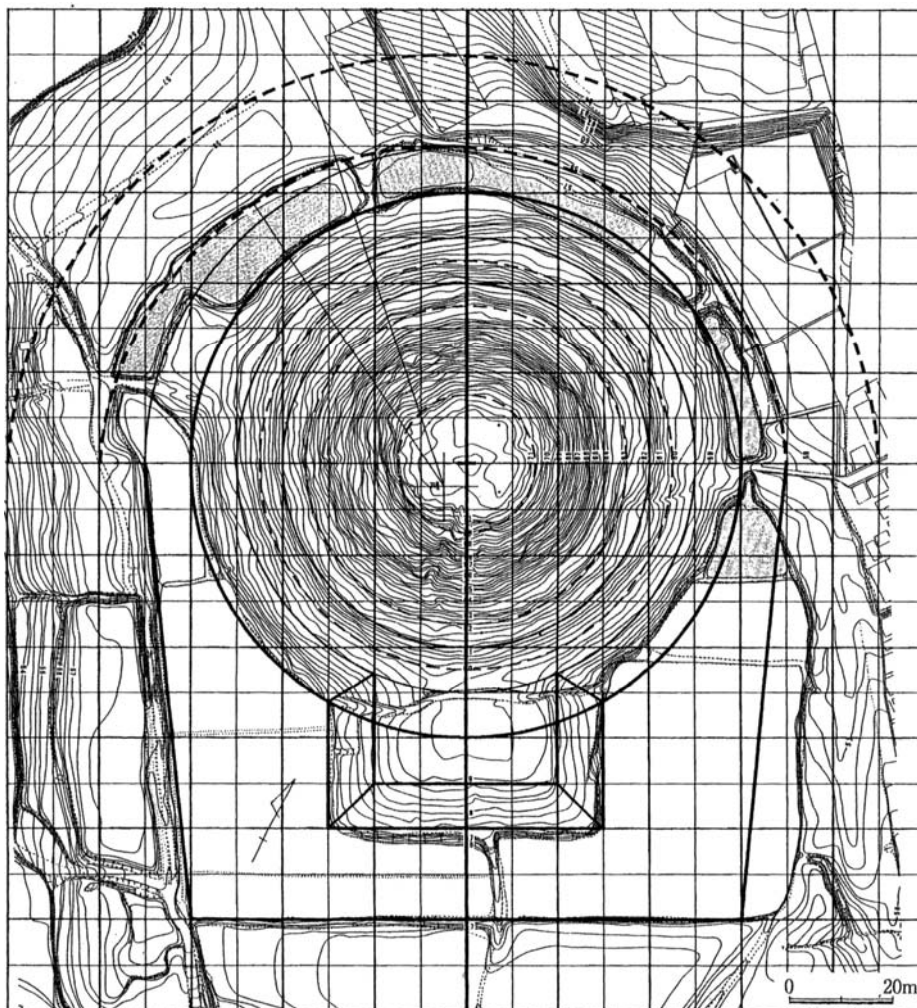
帆立貝式古墳の範囲を定めるということは、前方後円墳とは何か、前方部の規模や形態からみてどこまでを前方後円墳とするかという、前方後円墳自体の定義の問題に帰着する。この重大な問題が、実はこれまであいまいなままに放置され、墳形の差異に関する本質的考究のないまま、前方後円墳や帆立貝式古墳の築造企画論が展開されてきているのが現状ではなかろうか。

古墳の築造企画すなわち基本設計(法)を解明するためには、1基1基の古墳について、主丘部の6等分値や8等分値ではなく、24等分値という実際の古墳の設計、施工に用いられたであろうスケールによって検討し、古墳各部を単位数によって客観的に把握する基礎作業が必要であると考え²⁾。迂遠な道であるが、このような検証を経ず、感覚的判断で古墳の類型や系譜を論じる道は筆者の採るところではない。

本書では帆立貝式古墳について、突出部の長さ、幅などを24等分値の単位数で把握し、主丘部に対する突出部の規模からみてどのような分類が可能か検討し、あわせて前方後円墳と帆立貝式古墳の境界の問題について考える。

最終的には、分類された諸形態が、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などの「墳形」とならんで、倭王権による古墳(の墳形と墳丘規格)による身分秩序の表出という造墓管理政策の中で、どのように位置づけられていたかを考察しなければならない。

大小様々な突出部の付設が、造墓主体者の自由な発意で行われたものか、それともそのような造作にまで倭王権の造墓指定が及び、帆立貝式古墳における諸形態がそれぞれ独立した墳形としての位置を占めていたものか、その解明が最終的な目標となる。



図VI-1 乙女山古墳企画図（主丘部径 78 歩・106.9m） 1/1500

2. 造出付円墳と狭義の帆立貝式古墳の区分基準

1) 複数の突出部をもつ古墳

はじめに、造出付円墳と狭義の帆立貝式古墳を、客観的な基準を示して区分できるかどうか考える。この問題の解決のためには格好の材料が存在する。複数の突出部をもつ古墳である。

奈良県乙女山古墳（北葛城郡河合町，5期）は、帆立貝式古墳としては宮崎県男狭穂塚古墳（西都市）に次ぐ規模をもつ巨墳である（木下亘ほか1988）。主丘部の南側に方形の短い突出部をもつが、もう一つ主丘部左側のやや後背部寄りの位置に、ずっと小さい突出部をもつ（図VI-1）。このように複数の突出部をもつ帆立貝式古墳を以下、「複突出墳」という。この場合の突出部とは、主丘部から直接派生するものにかぎるものとし、前方後円墳の造出のように、主丘部（後円部）から派生した突出部（前方部）からさらに派生するか、あるいは主丘部と突出部の接続部に取りついて双方にかかるものをのぞいている。

櫃本は乙女山古墳の大突出部を前方部と捉え、墳形は帆立貝形前方後円墳であるとする（櫃本2000:P73）。遊佐は大小の突出部をともに造出とし、「2つの造り出し付き円墳」と判断している（遊佐1991:P51）。

小突出部については両氏とも造出とする見方で異ならないが、大突出部の評価については数値化された区分基準を示した上での判定ではないため、ともに客観性、説得性に欠ける。ただし、両氏がいち早く着

目したように、個々の帆立貝式古墳の突出部について、その性格をどのように捉えるかという判断材料を得るために、複突出墳における大小2つの突出部のあり方を確認しておくのは意義のあることと思われる。また、突出部が1つだけの古墳に比べ計測部位が多く求められ、24単位設計法の存在を立証する上でも有効な材料となる。

ここでは大・小突出部の規模を基準単位で把握し、数値的に区分可能かどうか検討する。

2) 乙女山古墳の突出部

乙女山古墳の墳丘規格は径78歩(106.9m)、1単位は3歩1/4(4.45m)である。

突出部は2つあり、大突出部は長さ(CD)4単位、幅12単位であり、側面、前面の裾線は基準単位にもとづく方格線に一致している。

小突出部の前面は直線にならず、主丘部中心から14単位目の円周に一致するカーブを描くので、長さ2単位と捉えられる。幅は5単位である。

この部分の周濠外周線は主丘部墳裾線と同心円を描かない。様々に検討した結果、主丘部中心点0から左へ1単位、前方へ1単位の方格交点を中心として、半径15単位の円弧を描くと現状の周濠外周線によく一致することがわかった。このように措置することで小突出部前面の周濠幅を確保したこと、また、逆に主丘部後背部右半の周濠幅が不自然にせばまっている理由が理解される。

周濠の幅は、大突出部の前面で4単位、外堤上面の幅も4単位である。周濠外周の前面は、墳丘主軸線から左隅Rまでちょうど12単位あり、右隅Rから側縁部にかけてのラインは乱れているが、本来は左右相称に企画されていたとみて幅24単位で復元した。古墳の主要各部は4単位またはその整数倍の単位数で割りつけられており、4単位区によって概略設計されている可能性が高い。

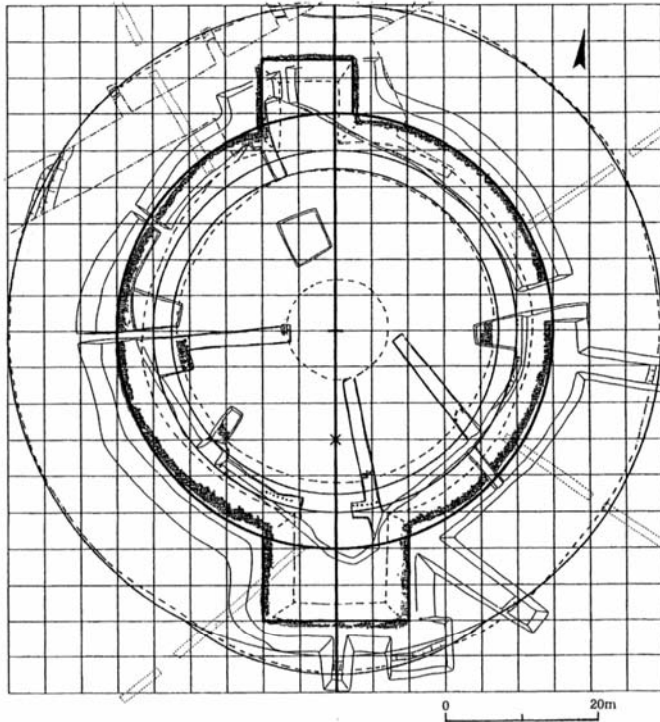
このような一致状況から、この古墳の主丘部規格の判定に誤りないこと、大突出部長は4単位、小突出部は2単位であることが確認された。

3) 大・小突出部の長さ、幅、高さ

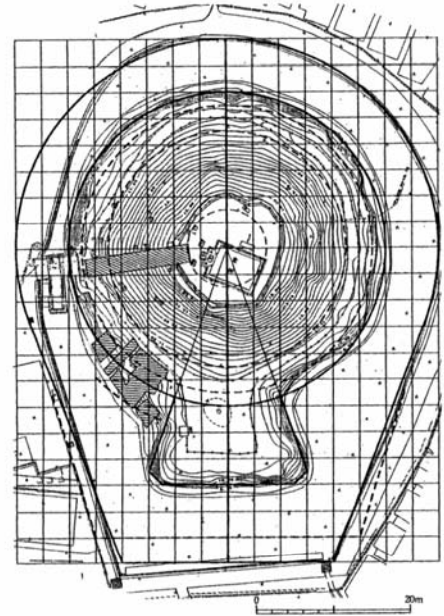
同様の作図作業によって、複突出墳の主丘部規格、突出部の長さ、幅を確定した(図VI-2~5)。その結果を表VI-1に示す。判定の根拠その他の説明は拙著『前方後円墳と帆立貝古墳』(沼澤2006)にゆずり、ここでは省略する。

表VI-1 大小突出部の平面規模比較表 (数字は単位数)

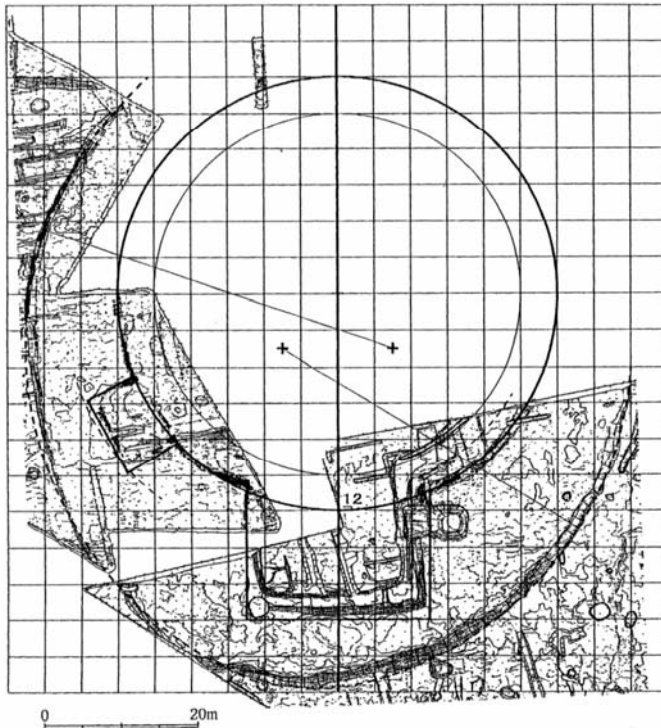
古墳名	大突出部		小突出部	
	長	幅	長	幅
乙女山	4	12	2	5
久保田山	4	8	3	5
笹塚	4	10	2	6?
マンジュウ	4	15	3	3
野毛大塚	5	8	2	3
神前山1号	6	12	2	8
若宮八幡北	6	12	2	10
御願塚	6	12	3?	3?
楯塚	6	10	3	4
鞍塚	6	12	3	4
高塚	6	8	3	6
供養塚	9	16	2	5
天乞山	4	6	2	3
明合	6	8~10	3	7



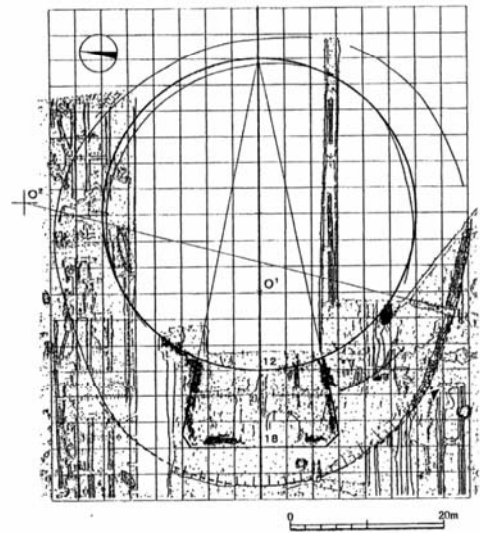
久保田山古墳企画図（主丘部径 42 歩・57.5m）



御願塚古墳企画図（主丘部径 30 歩・41.1m）

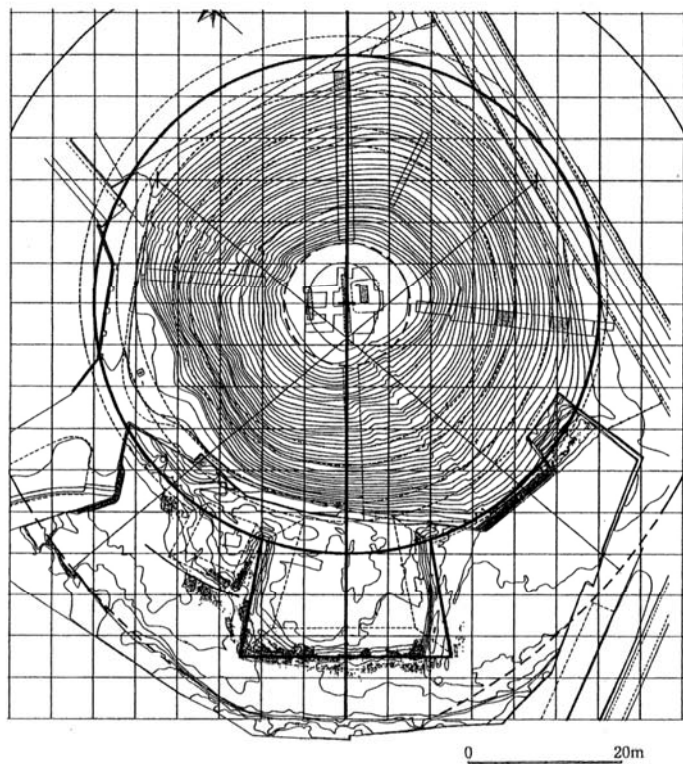


盾塚古墳企画図（主丘部径 42 歩・57.5m）

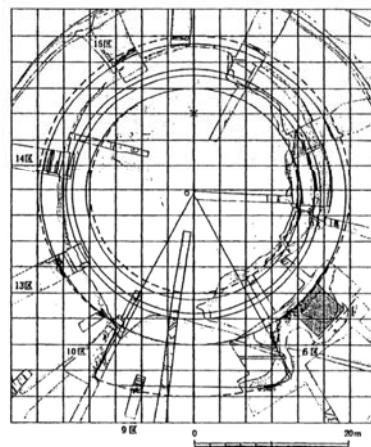


鞍塚古墳企画図（主丘部径 30 歩・41.1m）

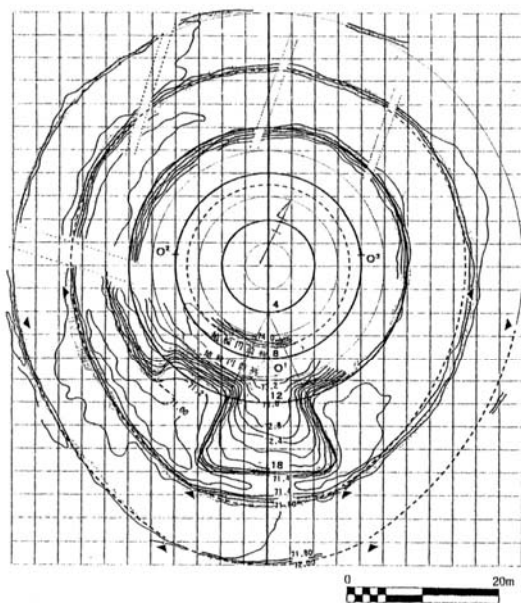
図VI-2 複数の突出部をもつ帆立貝式古墳 (1)



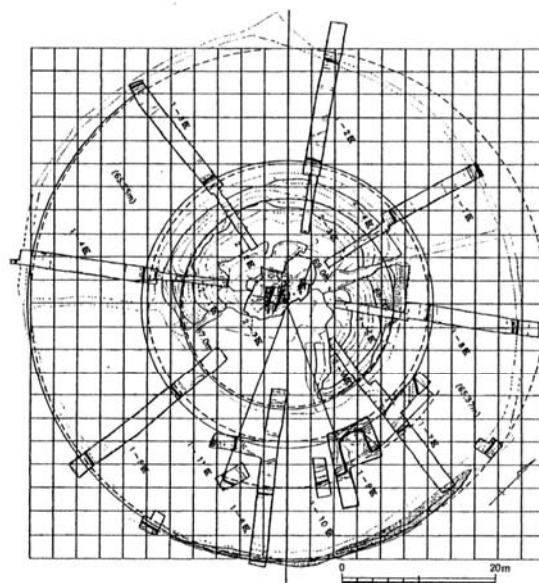
野毛大塚古墳企画図（主丘部径 48 歩・65.8m）



マンジュウ古墳企画図（主丘部径30歩・41.1m）



若宮八幡北古墳企画図（主丘部径 27 歩・37.0m）

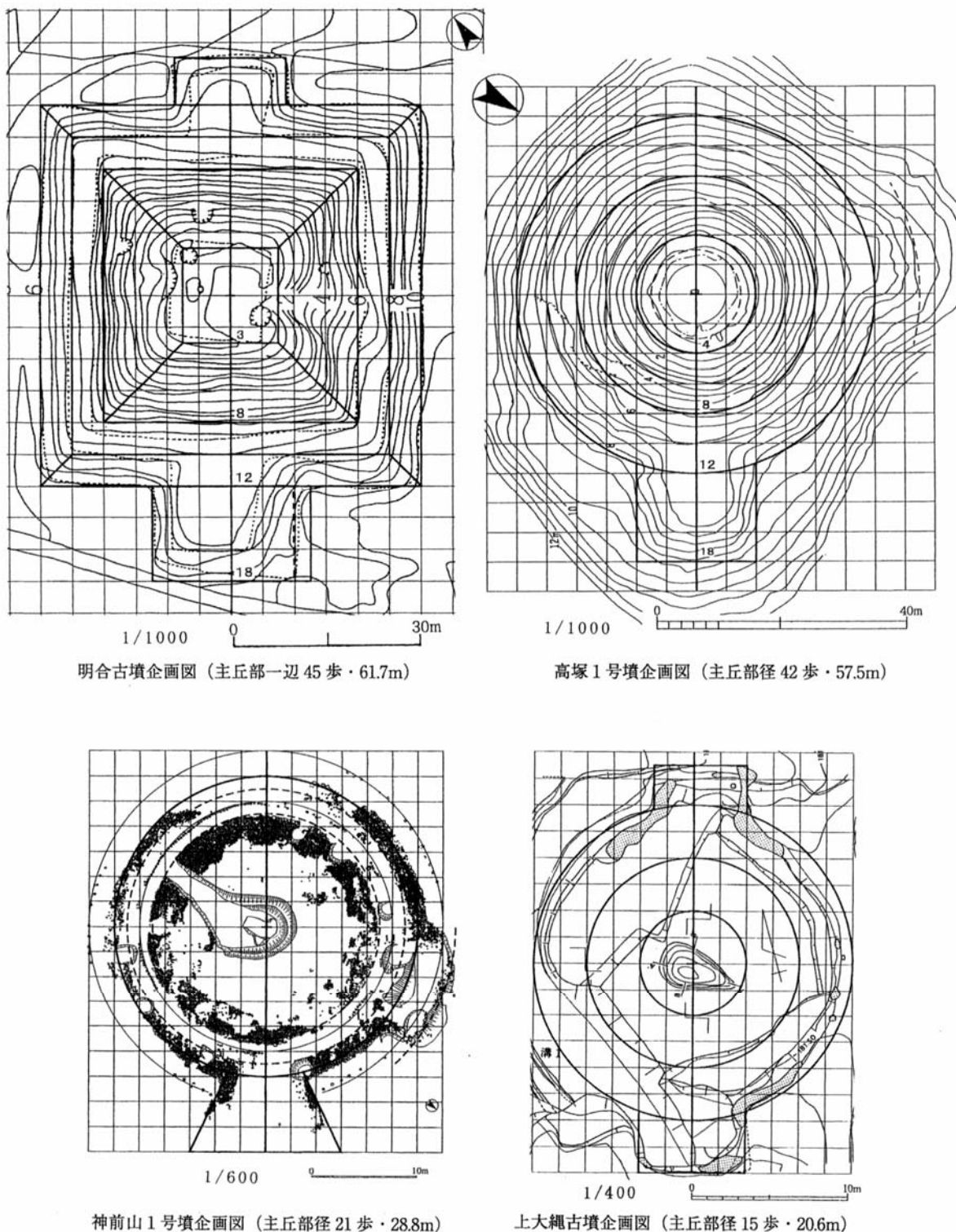


笹塚古墳企画図（主丘部径27歩・37.0m）

図VI-3 複数の突出部をもつ帆立貝式古墳 (2)

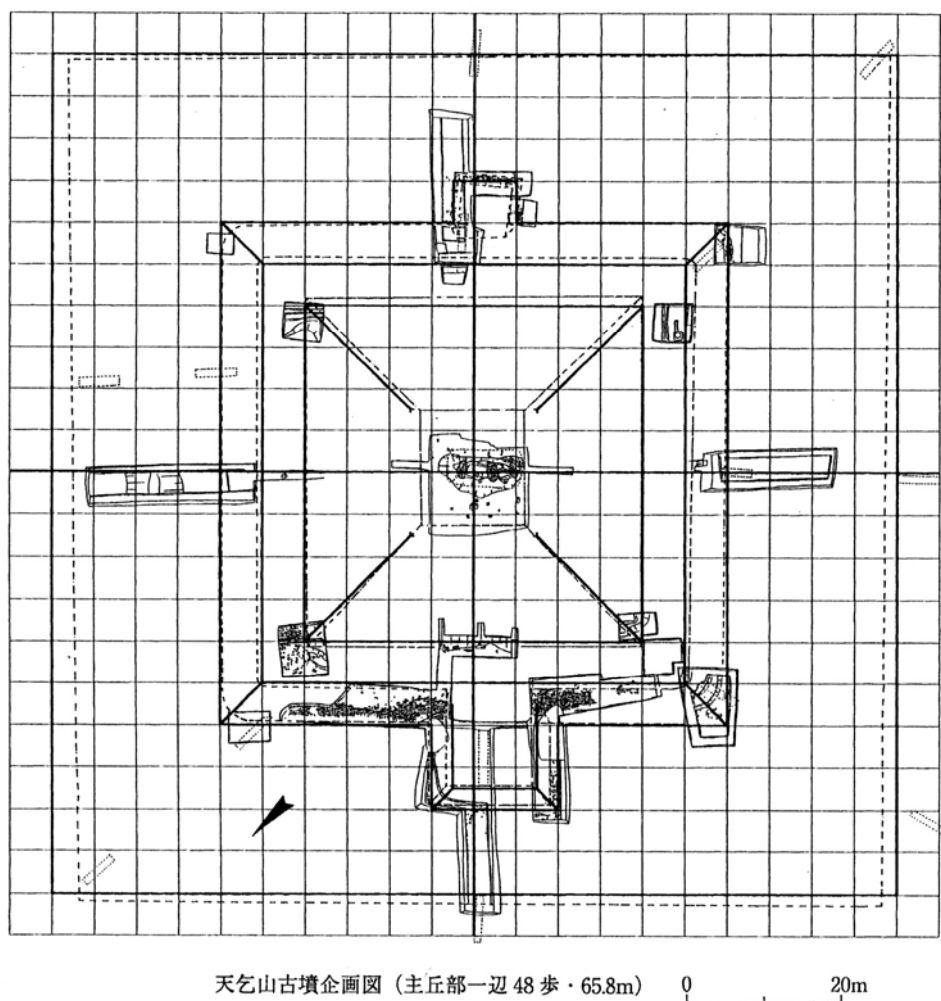
現在確認している複突出墳は15基、このうち2基は主丘部が方形の例である。企画図を示して検討した複突出墳14基（うち方丘系2基）の大・小突出部の長さ、幅を整理すると表5のとおりとなる。

長さ 大突出部の長さは4単位と6単位が複数あり、5単位と9単位が各1基あるが、小突出部は2単位と3単位の2種にかぎられ、時期、地域をこえて共通の約束ごとが認められるといつてよい。



図VI-4 複数の突出部をもつ帆立貝式古墳 (3)

幅 大突出部の幅は8単位, 10 単位, 12 単位の3種が多数を占めるが, 小突出部の方は3単位から 10 単位までとばらつきが大きく, 神前山 1 号墳や若宮八幡北古墳など径 30 歩以下の小規格古墳で単位数が大きくなっている。



図VI-5 複数の突出部をもつ帆立貝式古墳 (4)

小規格古墳では1単位長も短いので、突出部の上面に一定の広さを確保するためには、長さ、幅の単位数を増やすしかない。面積の確保がもつぱら幅の増大によって実現されていることは、小突出部の長さの設定に何らかの制約があったこと、反面、幅についてはそのような制限のなかったことを物語る。

高さ 高さについては、数値化して表示することはできないが、大・小突出部で明確な差異が認められる。大突出部の上面は、基本的に主丘部中段テラスと同じレベルに仕上げられ、両者が一続きの平面となる。

これに対し、小突出部の方は中段テラス面まで達せず、主丘部第1段斜面の中腹に突き当たって終わる。このような状況は乙女山、御願塚、明合古墳のほか、天乞山および野毛大塚古墳の復元整備された姿に見ることができる。神前山1号と盾塚古墳については、主丘部中段テラスの埴輪列から大小それぞれの突出部へ派出する埴輪列の有無によって、同様の状況であったことが推測される。小突出部のこのような状況は、前方後円墳における造出の接続状況に共通するものといつてよい。

4) 小突出部は造出

小突出部長に3単位をこえるものがないことは、突出部長3単位と4単位のあいだに、突出部の性格を区分する明確な境界が設定されていた可能性を示唆する。わずかに1単位の差であるが、長さ3単位以下の突出部と、4単位以上のものとのあいだには決定的な性格差が存在したと推測される。

遊佐、櫃本両氏とも、小突出部は「造出」であるとの認識で一致している。常識的判断として異論の少ないところと思われ、筆者も小突出部は造出であろうと考える。

大突出部については、単位数によって長さが明確に区別されていることから、小突出部とは性格を異にする施設と認めるのが適当であろう。

大突出部を正面³⁾として中軸線を設定すると、小突出部さえなければ、古墳全体の平面プランは中軸線をはさんで左右対称に企画されている(方丘系の複突出墳をのぞく)。このことも、小突出部が副次的な施設(＝造出)であること、大突出部は造出ではなく、前方後円墳における前方部のように、墳形の決定要素となる主たる突出部であることを示唆している。

久保田山古墳では、大小2つの突出部は中軸線上の前後対称の位置にありながら、小突出部は左にかたよって付設されていた。小突出部(＝造出)の設置位置は、前方後円墳や帆立貝古墳の築造企画における左右対称という規範に制約されることのなかったことが理解される。あるいは、あえて左右対称の位置からずらすことによって、その従属性を明示すべく意図されたものとも考えられる。

なお、方丘系の2基のうち天乞山古墳では、大小突出部ともその中軸線は主丘部中軸線からずれており、小突出部をのぞいても左右対称になっていない。明合古墳も大突出部は中軸線がずれている可能性があり、あえてこのような非対称性を指向した可能性も考えられる。左右対称の前方後方墳との差別化意識の存在が想定され、その大突出部を前方部とみなすことが適当でないことを示唆している。

5) 前方部に対する「小方部」

遊佐、櫃本両氏のように、造出付円墳をのぞいた帆立貝式古墳を「帆立貝式(形)前方後円墳」と捉える立場をとれば、大突出部は「前方部」とみなされることになる。

妥当な見解のように思えるが、長さ4単位、6単位という短小な突出部と、その数倍のボリュームをもつ前方後円墳の前方部とでは何らかの性格の差異があったと考えられ、同じ呼称を与えることには多少の抵抗を感じる。そこで、これからは大突出部を「小方部」(「小前方部」の略)と呼んで、造出および前方後円墳における前方部と区別することとしたい。4単位以上何単位までを小方部とするかという問題についてはあとで考える。

企画図による墳丘平面プランの検討の結果、小方部と造出の別は、その長さ(単位数)によって区分するのが最も適当と考えた。数ある形態的要素のうちの一つだけを根拠とした単純な区分案であるが、複突出墳において、大・小突出部の長さが24単位設計法の基準単位数によって明確に区分されている事実をみれば、最も有効で客観的な区分基準になると思われる。また、複突出墳における大小2つの突出部のあり方からの類推によって、突出部が1つだけの帆立貝式古墳についても、長さが3単位以下の突出部は造出、4単位以上のものは小方部と捉えて差し支えないものとする。

小方部、造出の区分に関する形態面から見た結論は以上のとおりであるが、両者の性格の差異はどこにあるかという本質的な問題が残る。この課題についてはあとで再度検討するが、前方後円墳における前方部は、その墳形に固有かつ不可分の構成要素であるのに対し、造出は墳形構成の要素ではなく、確定された墳形に、別個の要因ないし目的によって付加された副次的施設とする一応の定義を、ここでは示しておきたい。

前方後円墳から前方部を取り去れば円墳と化すが、造出の有無にかかわらず前方後円墳は前方後円墳であることに留意すべきであろう。小方部の性格が前方部に準ずるものであろうことも、以上みた複突出墳における大・小突出部のあり方から予測されるところといえよう。

3. 狭義の帆立貝式古墳

1) 小方部をもつ古墳

これまでの検討によって、円墳状の主丘部に短小な突出部を付設する古墳という程度の漠然とした概念規定による帆立貝式古墳の中から、造出付円墳を分離する作業が完了した。造出付円墳をのぞいた、長さ4単位以上の「小方部」をもつ古墳が狭義の帆立貝式古墳ということになる。

筆者は、小方部をもつ古墳は円墳とも前方後円墳とも異なる墳形と捉えるべきであると考え。したがって、この種の古墳には独立した墳形として適正な名称を付与すべきと考えるが、名称の問題についてはあとで検討することとして、狭義の帆立貝式古墳を「帆立貝古墳」と呼ぶことにして論を進めていきたいと思う。

4単位以上何単位までを小方部とするかという問題も残されているが、これはすなわち前方後円墳と帆立貝古墳との境界を形態上どこに設定するかという大きな課題に通じる。この問題についてもあとで触れることとして、ここでは帆立貝古墳として問題ないと思われる長さ4単位から6単位の古墳について見ておきたい。

2) 月の輪古墳の墳形

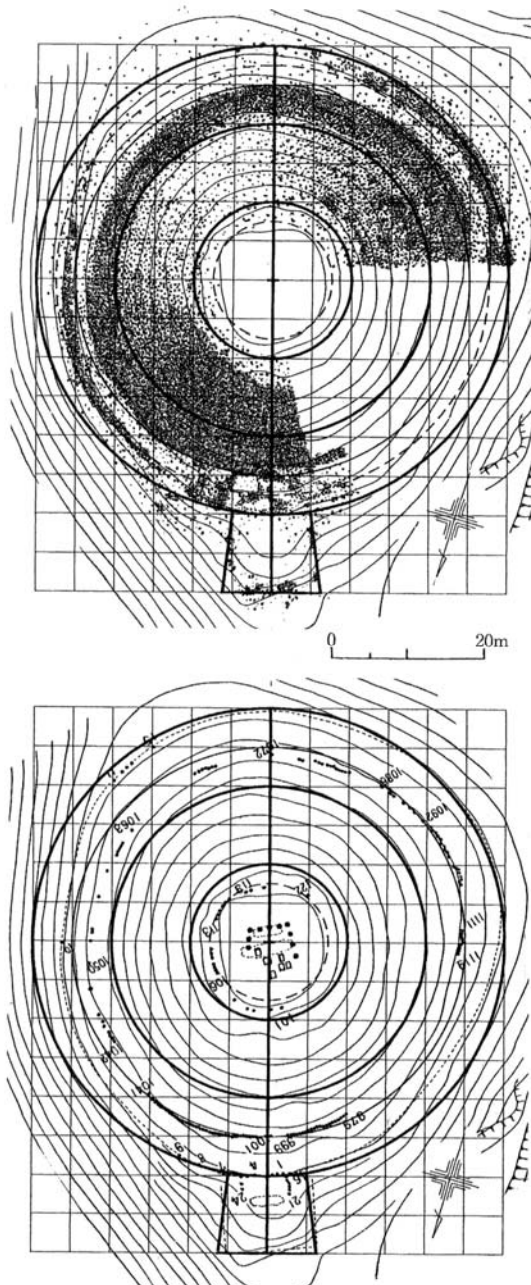
報告書で明確に「造り出しをもつ円墳」（西川1960:P327）と規定され、遊佐、櫃本両氏のほか多くの研究者が疑いもなく同意する岡山県月の輪古墳（5期）の突出部は、筆者の検討によれば長さ4単位であり、造出とは認められない（図VI-6）。

主丘部規格は三重県明合古墳（方丘系）と同じ45歩（61.7m）の中間規格である。墳裾の葺石基底線は、墳丘左側では急斜面が迫っているため径がせばめられ

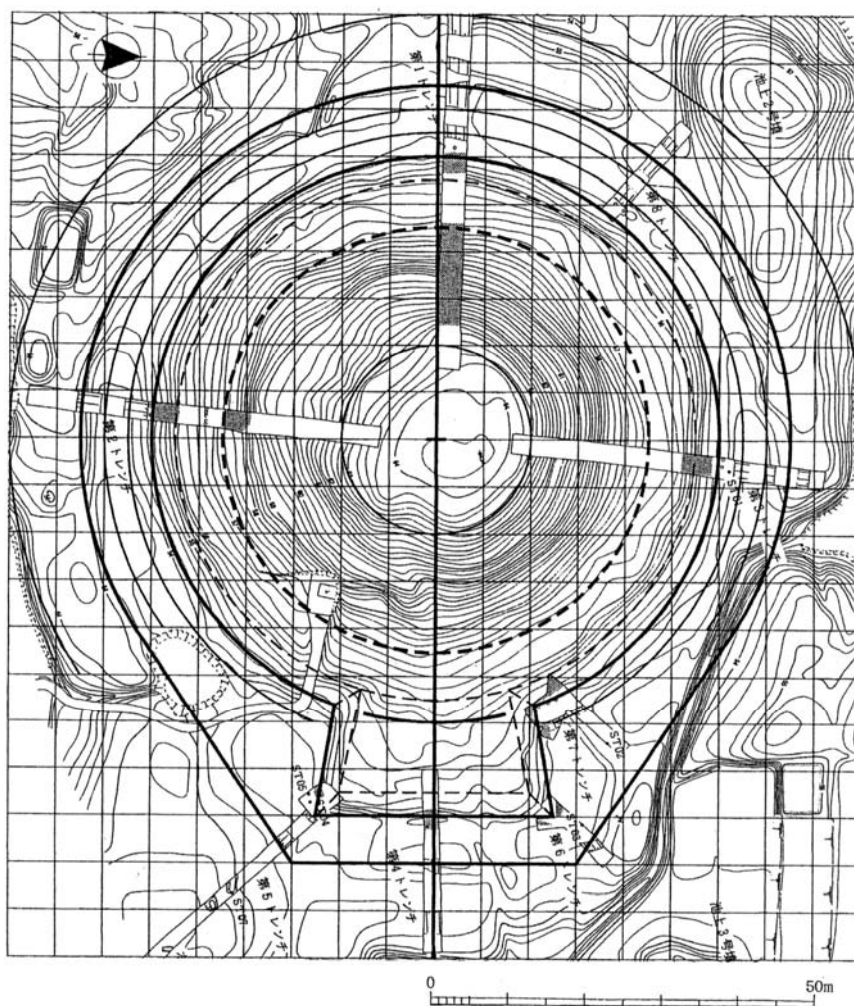
ているが、右側では半径12単位目の円周によく一致する。第1段斜面幅は1単位、テラスの幅も1単位である。第2段裾線は10単位目、墳頂平坦面は半径4単位とみられる。

突出部の長さは4単位、幅はくびれ部で4単位、側縁の葺石列は先端に向かって多少広がるようで、前面の幅は5単位と捉えられる。突出部上面に見られる埴輪列の左右の間隔は2単位、先端に向かってハの字状に若干広がっていくように見られるので、報告書の推定のように、突出部自体も先端に向かってわずかに広がる台形プランをもっていたとみてよい。中段テラスをめぐる埴輪列は10単位目に一致するので、第2段裾線に沿って樹立されていたことがわかる。墳頂部埴輪列の半径は3単位である。墳裾に部分的に残る埴輪列は12単位目に一致する。

企画図に見るように月の輪古墳突出部の長さは4単位であり、筆者の分類基準では造出ではなく小方部と



図VI-6 月の輪古墳企画図（主丘部径45歩・61.7m）



池上古墳企画図（主丘部径 54 歩・74.0m）

図VI-7 突出部長4単位 of 古墳 (1)

なる。この古墳の小方部は一見して非常に小さく、そのような印象が、これを造出とする見方を主流とする要因になっていたと思われる。そのように見えるのは小方部の幅が5単位と小さいためで、これまで見てきた小方部長4単位の古墳では、その幅は乙女山古墳 12 単位、久保田山古墳 8 単位と月の輪古墳よりかなり大きかった。

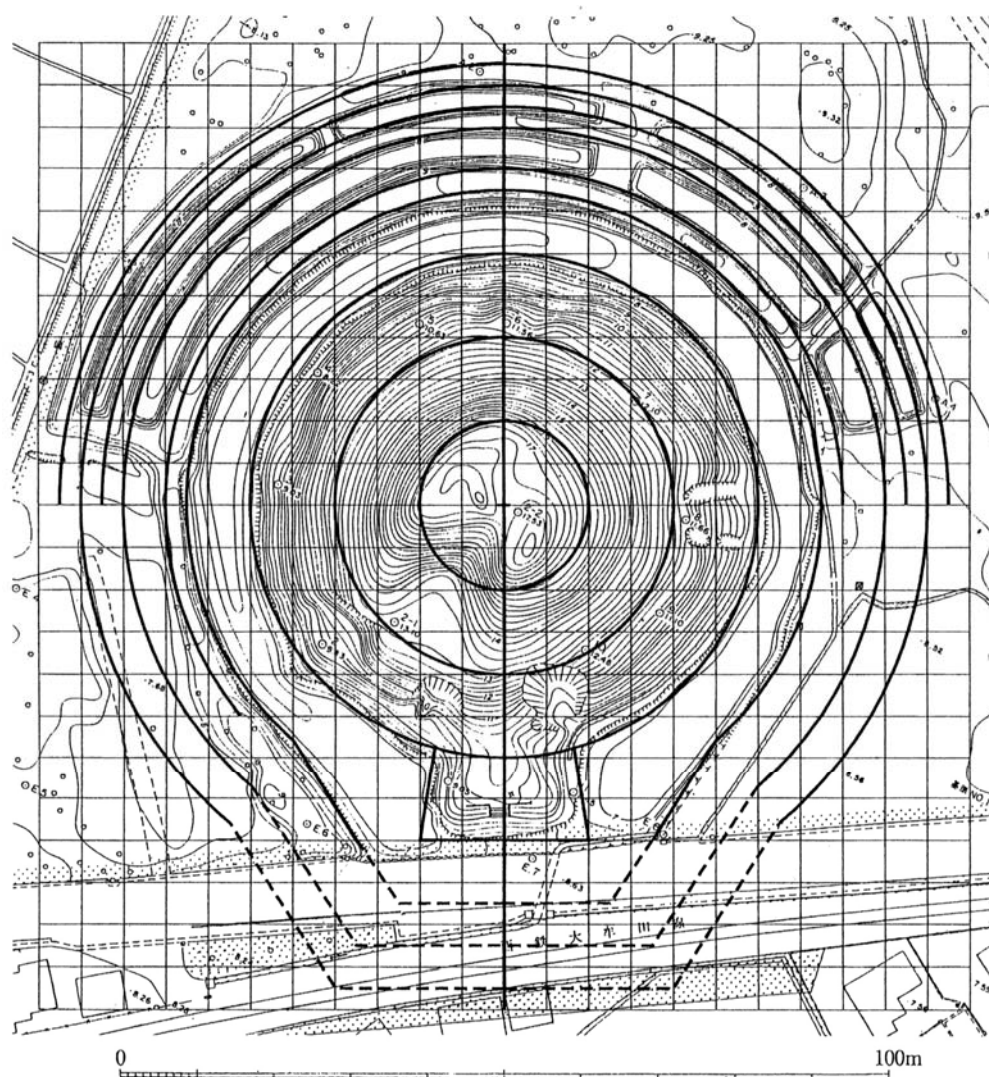
この古墳は山稜頂部に主丘部を置き、小方部をせまい尾根筋に向けて設定せざるをえないという地形的制約から、幅を大きくすることができなかつたとみるのが無理のない解釈といえよう。このような事情で小方部が見かけ上小さいため、従来の印象判断による墳形の捉え方では造出付円墳とみなされてきたものと思われる。24 単位企画図法によれば、月の輪古墳は明らかに小方部長 4 単位の帆立貝古墳と判定される。

3) 小方部長 4 単位の古墳

小方部長 4 単位の事例は多いが、5 基だけ企画図を示す (図VI-7～9)。

奈良県池上古墳 (5 期) は、第 1 段斜面の葺石基底石で墳丘規格をおさえると径 54 歩 (74.0m, 1 単位 3.08 m) である。基底石のすぐ外側を円筒埴輪列がめぐり、報告者もこの埴輪列が「実質的な墳裾を示すもの」

(坂 1992) と記述している。企画図でも 12 単位目の円周は葺石基底石列に一致し、そのすぐ外側を埴輪列がめぐる。



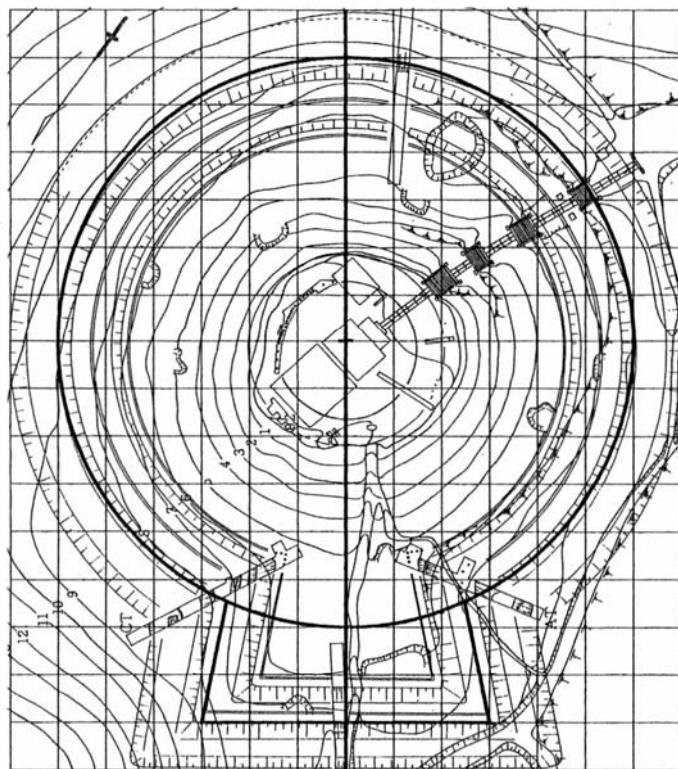
御塚古墳企画図 (主丘部径 48 歩・65.8m)

図VI-8 突出部長4単位の古墳 (2)

埼玉県雷電山古墳(5期)は、主丘部径73mとの報告(佐藤1986b)のとおり、池上古墳と同じ径54歩(74.0m)の規格でまちがいない。高崎情報団地遺跡16号墳(7期)の周溝は、中心も半径も異なる4本の円周線がなめらかに接続され、比較的整った倒卵形の外周プランとなる。後背部のみ主丘部と同心円で、両側縁と前縁線はそれぞれ異なる点を中心とする。

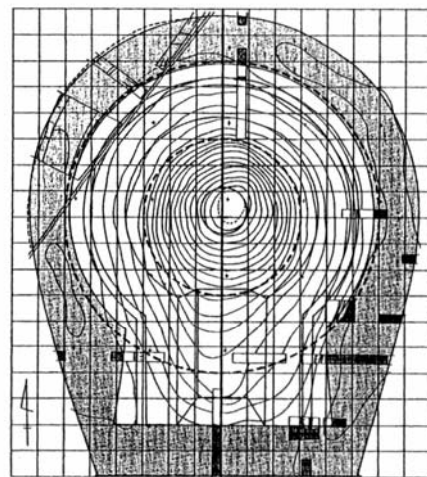
福岡県御塚古墳(9期)は3重の周溝と周堤をもつ稀有な事例であり、これが築造当初からの施設であることは江戸期の記録(『筑後将士軍談』)と史跡整備にともなう発掘調査によって確認される。周濠と堤の平面プランは馬蹄形に近いが、側縁部が若干くびれる無花果形であることが発掘で確認されている。

栃木県久部愛宕塚古墳(10期か)は「後円部径41.0m」との報告(梁木1995)のとおり径30歩(41.1m)の主丘部規格である。企画図には方格線および半径6単位と12単位の2本の円周線(太破線)だけを描いた。ほかの線はすべて報告者によるものである。当地に多い幅広の小方部をもつ古墳のうち、平面プランの確定された数少ない事例として貴重である。

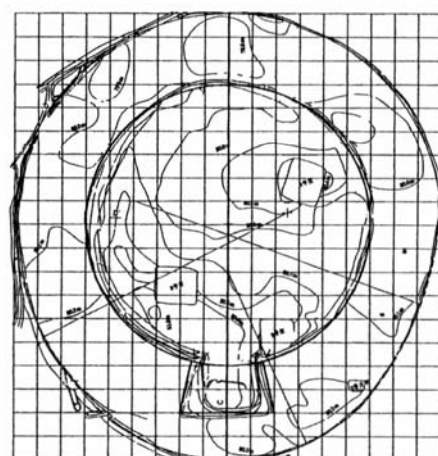


雷電山古墳企画図 (主丘部径 54 歩・74.0m)

0 20m

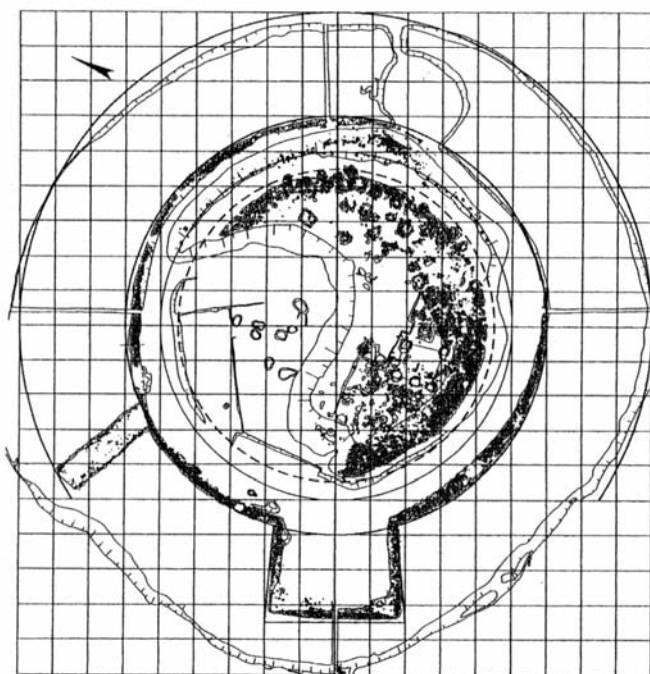


久部愛宕塚古墳企画図 (主丘部径 30 歩・41.1m)



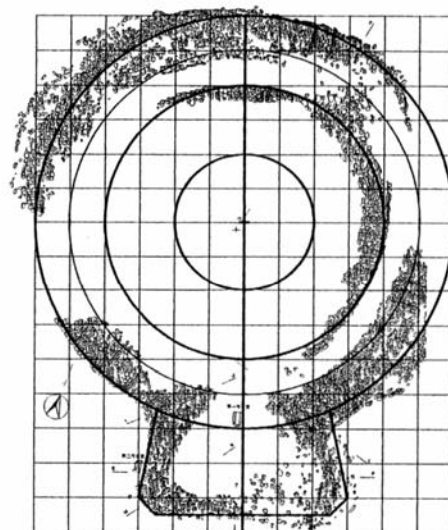
高崎情報団地遺跡 16 号墳企画図
(主丘部径 27 歩・37.0m)

0 10m



樋渡古墳企画図 (主丘部径 24 歩・32.9m)

0 10m 1/600

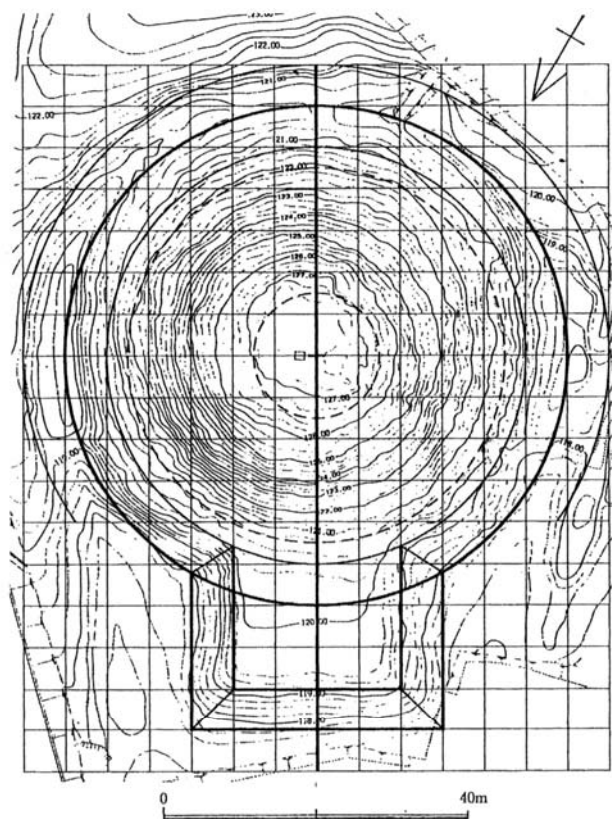


磯崎東 1 号墳企画図 (主丘部径 24 歩・32.9m)

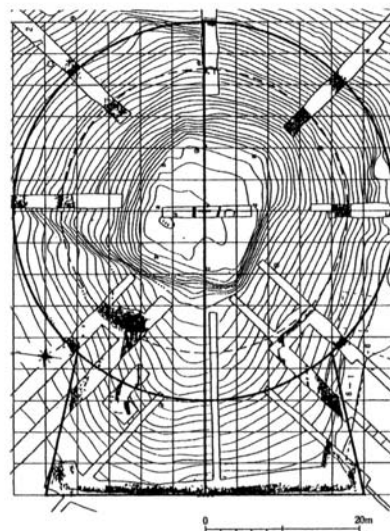
1/600

0 10m

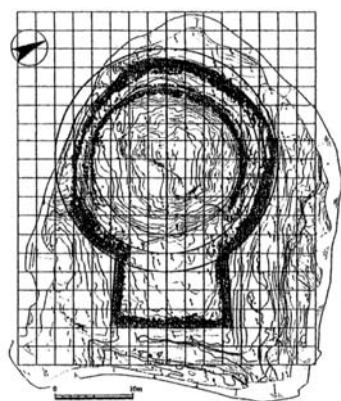
図VI-9 突出部長4, 5単位の古墳



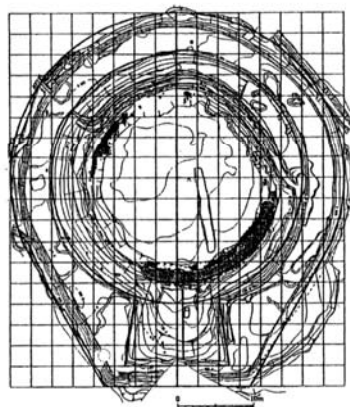
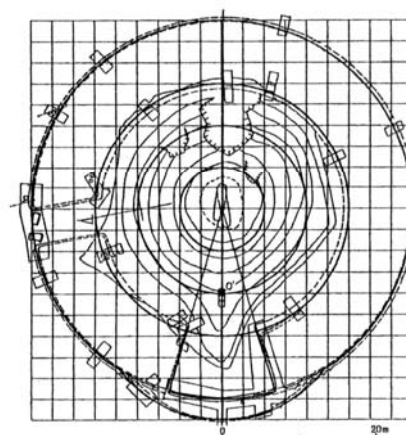
雨宮古墳企画図（主丘部径 48 歩・65.8m）



赤堀茶白山古墳企画図（主丘部径 36 歩・49.3m）



小立古墳企画図（主丘部径 21 歩・28.8m）

舞台 1 号墳企画図
（主丘部径 24 歩・32.9m）

狛江亀塚古墳企画図（主丘部径 24 歩・32.9m）

図VI-10 突出部長6単位 of 古墳

4) 小方部長5単位 of 古墳

5 単位の小方部をもつ事例として確認しているのは3例（野毛大塚を含む）しかなく、7 単位の事例が今のところ確認されていないことから、奇数単位長の小方部をもつ帆立貝古墳は例外的な存在とみてよいと思われる（図VI-9）。福岡市樋渡古墳（吉武S1号墳，5期）は、弥生時代中期の墳丘墓を核として主丘部が築造された古墳で、墳頂部は近世墓地のため破壊されていたが、墳裾基底石列がほぼ完全に発掘され、平面プランが明らかとなった。小方部長は4単位よりは明らかに長く、5単位とみておくのが妥当である。

茨城県磯崎東1号墳(8~9期か)は海岸崖面の傾斜が迫った場所に立地するため、主丘部背後左側と右側くびれ部付近の葺石が滑落し、大きく旧状を損なっている。主丘部裾の葺石基底石列が右側くびれ部付近で外側へ若干張り出しているが、施工後の変形とみられ、造出の痕跡である可能性は低い。

5) 小方部長6単位の古墳

長さ6単位の事例は複突出墳に多く見られた。単突出墳で説得力ある企画図を提示できるものはそれほど多くはないが、ほかにも広島県三玉大塚古墳をはじめ6単位の可能性のある古墳はかなり多く存在する(図VI-10)。

滋賀県雨宮古墳(5期)は、発掘資料ではないが精細な測量図からほぼ正確な判定が可能である。周溝の外周プランは、馬蹄形のほか無花果形、一定の幅で墳丘を一周する墳丘相似形式にも可能性がある。同じ滋賀県の椿山古墳や地山古墳の存在から、墳丘相似形の可能性が最も高いように思われる。

群馬県舞台1号墳(6期か。西田ほか1991))は、見かけ上の周溝内壁斜面の下端線を墳裾面とみたとき、主丘部径24歩(32.9m)、小方部長6単位、前幅10単位と捉えられる。

群馬県赤堀茶臼山古墳(6期)は、戦後の後藤守一調査時の図面(後藤1929)から主丘部径36歩(49.3m)、小方部長6単位と判断していたが、近年の調査資料によってその正しさが裏づけられた(松村ほか1996~1998。企画図は平成9年作成の調査図を使用)。小方部の前幅は20単位で、長さの割にきわめて幅広いやや異例ともいえる平面プランといえるが、その後も群馬県や栃木県では幅広の小方部をもつ帆立貝古墳が多く営まれたようである。そのような帆立貝古墳のプラン、時期が確定されれば、その分布状況などから、歴史的に何か意味のある情報が得られる可能性は高いと思われる。小方部の側縁線は直線ではなく、中間部が若干内湾するカーブを描いていたようである。

奈良県小立古墳(7期か)は、発掘調査によって葺石の墳裾基底石列が完全に露呈されたが、狭隘な谷地形に占地したためか、主丘部裾線は正円形をなさずいびつである。企画図は左右のくびれ部近くの基底石列を基準に作図した。これによると、くびれ部付近の裾線は径21歩の円周線によく一致している。ところが墳丘右側では、ある一点を境として円周の曲率が変わり、円のふくらみを欠いて後背部へと向かっている状況が観察できる。左側後背部にかけて基底石は「乱雑に葺かれ」「谷奥など人目につきにくい箇所については見栄えは気にしないという意識があった」と推測されているように、この部分の施工は不正確である(村上ほか2002)。したがって、施工の良好な主丘部手前側の基底石列が一致する径21歩(28.8m)が当初の設計値だったとみてまちがいない。

周溝の外周形態は盾形だったというが、土砂の崩壊によって図化および写真撮影ができなかったとされ、現地説明会用の概念図しかよるべきものがない(桜井市文化財協会2000)。概念図によれば両側縁線が主軸に平行する盾形で、主丘部背後および小方部前面で周溝の幅4単位となっている(図VI-15)。橋本輝彦の教示によれば概念図はほぼ正確とのことであるが、概報の図からは前方へ向って多少幅をせばめる馬蹄形または墳丘相似形の可能性も捨てきれないように思われるものの、ここでは調査者の見解を尊重しておきたい。

東京都粕江亀塚古墳(8期)は、小方部の前面が直線でなく、周溝外周線と同じ半径18単位の円周に一致するカーブを描く。周溝外周線が小方部前面で凸レンズ状にふくらむ点とともに、後野円山古墳など造出付円墳で認められた特徴と共通する構成であることが注意される。ふくらみの円弧の中心は主軸線上の点 O^1 にあり、半径は10単位である。この周溝外周のふくらみについて報告者の小出義治は、「一見眼球の水晶体のような形状」と形容している(小出1985)。いい得て妙であり、主軸を横にして周溝プランを眺めると、まさに眼球模式図そのものといえる。このタイプの周溝プランを以後「眼球形」と呼ぶことにしたいと思う。

4. 境界領域の前方後円墳

1) 狭義の帆立貝式古墳の範囲

帆立貝式古墳の突出部の長さを、主丘部直径の24等分値の単位数で把握し、長さ3単位以下を造出、4単位以上を小方部、それぞれの墳形を造出付円墳と帆立貝古墳（狭義の帆立貝式古墳）とに区分し、墳丘プランの実態を単位数で確認する作業を行ってきた。

これまで見てきた4単位から6単位までの古墳は、視覚的な印象判断からも、これを帆立貝古墳とすることに異論の出される余地は少ないと思われる。4単位以上何単位までを小方部と認めるかという課題が残されたが、これはとりもなおさず帆立貝古墳と前方後円墳の境界がどこにあるのか、それを数値的に明確に示せるかどうかという大きな問題に通じる。

帆立貝式古墳と前方後円墳の境界に関する既往の区分基準について、もう一度、突出部の長さだけにかぎって見ておくと、遊佐は「帆立貝式前方後円墳」の前方部の長さは「後円部直径の2分の1を上限とすること」（遊佐1988：P28）とし、櫃本は「後円部径の1/3」（櫃本：1984：P59）までとする。24等分値の単位数に置きかえれば、それぞれ長さ12単位と8単位を両者の境界と捉えていることがわかる。ともに作図法にもとづく研究成果ではないので、その判断は主丘部と突出部の長さの比率を算出した結果に基づいて下されたものと推察される⁴⁾。

主丘部径に対する突出部長比の頻度グラフを作成した場合、1/2あるいは1/3という両氏が設定した境界線以下にドットが集中し、境界線の上にはいくばくかの空白があつて、その上に別の集中域があり、それが通常の前方向後円墳の範囲を表わすというような分布が示されれば、説得性のある区分基準として大方の承認が得られると思われる。しかし、櫃本の提示した頻度グラフではそのような状況を読みとれないことは既述のとおりである。したがって、何故そのような線引きが可能なのか別に何らかの根拠を示すことが必要と思われるが、説得性のある説明は行われていない。

上記2氏に対し、石部ら4氏は後円部直径の8等分値を1区として、突出部長1区から4区までの4種を帆立貝形古墳と捉えた（石部ほか1980：P88）。8等分値4区は24等分値の12単位なので、結論は遊佐と同じものとなっている。4氏の論では、突出部長1区型から8区型まで、1区（3単位）ごとの均等な間隔で各区型が配列される。区型の配列という面からは、どこにも帆立貝形古墳と前方後円墳とを明瞭に区分する段落は存在しないということになる。したがって、この場合も4区型と5区型の間に墳形を分かつ決定的な境界線があるとするには、別に何らかの根拠を示した説明が必要であろう。

4氏による古墳個々の築造企画の把握には問題も多いが、作図法にもとづく検討作業であり、図を示して測点を明示し、墳丘各部の捉え方について読者にも検証できる方法を採用している点で貴重な研究成果といえる。また、突出部の区数によって帆立貝古墳と前方後円墳とを区分しようとする方法は、下記の理由により有効なものと評価される。

2) 新たな墳形の創出

帆立貝古墳（狭義の帆立貝式古墳）は、造墓管理によって中央、地方の豪族の統制と序列化を図ろうとした倭王権の政策的必要上、新たに創出された墳形であろうと筆者は考える。

前方後円墳は、弥生墳丘墓から漸移的に発展してきたプランを、箸墓古墳築造に際し、おそらく中国の技術を導入して幾何学的な平面プランとして定着したものとみてよいと思われる。いわば自然発生的に生成した墳形といえるが、帆立貝古墳は、前方後円墳のプランをもとにして人工的に生み出された墳形とみる立場をとりたい。

その当否については本稿全体の論述および企画図で示した多くの事例によって判断してもらうこととす

るが、帆立貝古墳の創出に当たっては、新墳形の創出・採用という王権中枢部における政策意図に沿って、造墓管理政策を担当する実務官僚が専門的造墓技術者に指示し、新しい墳形の平面、立面の基本プランを提案させたものと推測される。

プランの策定に当たっては、前方後円墳に準じながら、それとははっきりと区別されうる墳形という注文が出されたであろう。

造墓管理政策の上で、円墳や方墳という単純な平面プランの墳形は、前方後円墳などにくらべ下位に置かれていたと考えられるが、何らかの事情でその中間的位置づけの墳形が必要とされたと推察される。

この場合、前方後円墳という既存の墳形との形態上の差別化は、突出部の規模において明示するという基本方針が貫かれた。端的には、その長さ、幅という平面規模を、24等分値の単位数で、あるいは2単位、3単位、4単位を1区とする大単位の区数で、数値的に明確に区分することによって最終的な承認が得られたものと思われる。高さについても段数の制限などの差別化策が講じられた。

新たな墳形が必要とされた事情についてはあとで検討するが、帆立貝古墳という墳丘プランが創案された経緯についての筆者の理解は以上のようなものであり、したがって石部ら4氏が8等分値の1区から8区までの区数の序列の中で、どこかに境界を認めようとする視点は妥当なものとして評価される。

3) 概略設計の基準単位

古墳設計の基準単位について、墳丘の立体的構成の決定という詳細設計には24等分値1単位が利用されたが、周濠外周や墳丘裾のラインなどを決定する古墳の概略設計には、24等分値の何単位かを1区とする大単位が用いられた可能性が高い。

石部らの採用する8等分値は、24等分値の3単位分を1区とする大単位「3単位区」と同じ長さであり、上田宏範の主唱する6等分値は「4単位区」の長さである。ほかに2単位1区という単位も用いられた可能性が高く、あらゆる墳形で最も合致度の高い大単位であり、概略設計にも詳細設計にも共用可能な実用的単位として広く用いられた。

帆立貝古墳の創出に当たり、主丘部に対する突出部の規模を一定の数値の範囲内と定めるのに用いられたのが24等分値の基準単位か、それとも2～4単位1区の大単位なのか、簡単には決しかねる問題であるが、墳形間の基本的な差別化という概略設計に類する作業であるから、大単位が用いられた可能性は高い。

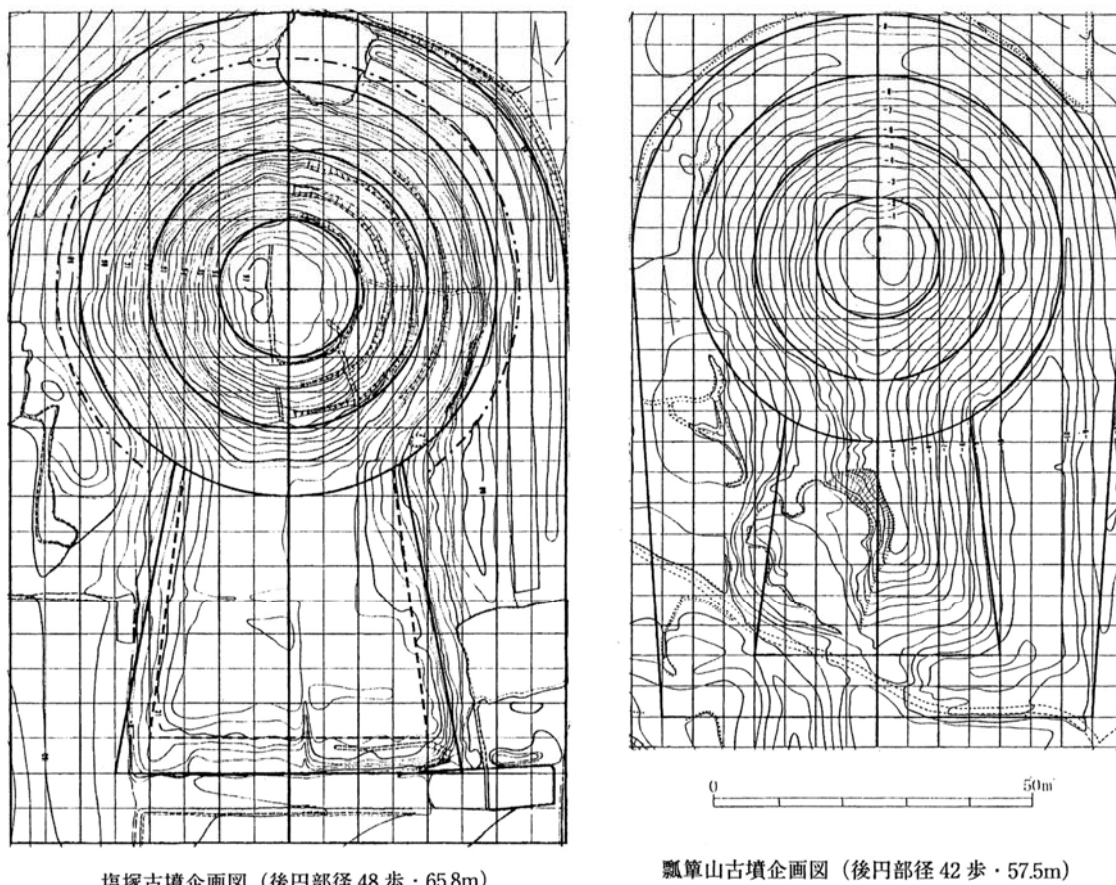
複数の突出部をもつ帆立貝古墳を検討した結果、長さ4単位以上を小方部として造出から分離できることが確認された。4単位区が用いられ、その1区が墳形の一方の境界線と定められた証拠と捉えることが可能である。ただし、そうではなく、用いられたのは3単位区の方で、造出の長さがその1区以下におさえられているのがその証拠だとする見方も成立する余地は存する。

前者の立場に立って、4単位区の区数で帆立貝古墳という一つの墳形の範囲が定められたと仮定すると、下限の1区に対し上限については必然的に2区8単位か、3区12単位かという選択になる。後者の場合は、3区9単位か4区12単位のどちらが上限になるかという議論となろう。

その結論は、その範囲にある古墳個々の平面プランの検討によっておのずと明らかになるものと思われる。以下、突出部長8単位から12単位の古墳について企画図による検討を行っていきたい。

4) 塩塚古墳の墳形

石部ら4氏が前方後円墳との境界に位置するとした「4区型」(3単位区の4区=12単位)の帆立貝形古墳として例示した古墳は奈良県の塩塚古墳、オセ山古墳および三重県毘沙門塚古墳の3基である。このうち佐紀王陵区にある奈良市塩塚古墳(5期)は、一見明らかな前方後円墳であり、このような古墳を帆立



図VI-11 塩塚古墳、瓢箪山古墳企画図

貝式古墳とみる感覚を筆者はもたない。

前方部4区という捉え方について検討してみると、4氏は後円部径を70mとみているが、報告書の把握は65mであり、墳丘規格に関する筆者の持論によれば径48歩(65.8m)が第一候補となる。その値の企画図(図VI-11)では、半径12単位の円周は墳裾線にうまく一致しているように見える。この1ランク上の径54歩(74.0m、企画図に一点鎖線で描出)では大きすぎて適合しないことは明らかである。

前方部は奈良時代に大きく削平されているが、右隅角付近の墳裾部等高線は整っており、旧状をとどめているように見える。ここを基準にして復元すると前方部長16単位、前幅は20単位となる。報告書によれば前縁部の本来の墳裾線は、現状の墳裾より5mほど後退した位置にあったという(河上ほか1979)。仮に2単位(5.48m)短いとすれば前方部長は14単位となるが、それでも4区(12単位)より長い。

図には破線で、近傍の佐紀陵山古墳(現・日葉酢姫命陵、図113)の前方部プランと同じ長さ14単位、前幅16単位、くびれ部幅12単位の企画線を描き入れた。2種類の前方部企画線を見ると、塩塚古墳の前方部長は16単位とみておくのが妥当と思われる。百歩譲ってもせいぜい15単位というところで、4氏のいう4区(12単位)型とみることは到底できない。いずれにしても、このような古墳を帆立貝古墳とみたのでは歴史の認識を誤る。

石部らは取りあげていないが、同じ佐紀王陵区西群中の瓢箪山古墳(4期)は後円部径42歩(57.5m)で、前方部は佐紀陵山古墳と同じ平面プランをもち、長さ14単位、前縁とくびれ部での幅も共通する(図VI-11)。周濠外周の側縁線は前方部先端に向かって幅をせばめる盾形に近い馬蹄形で、周濠外周プランを

含め佐紀陵山と共通する部分の多い古墳といえよう。ともに塩塚より前方部が未発達なプランをもつが、この2基についても帆立貝古墳に含めない判断を下して何ら問題ないと思われる。

ほかに前方部長14単位の事例としては佐紀王陵区東群のコナベ古墳、古市王陵区の菅田御廟山古墳(現・応神天皇陵)、津堂城山古墳などがあり、いずれも堂々たる前方後円墳であることは説明の要もない。

以上、塩塚古墳を突出部長12単位の類例とすることのできないことは明らかである。4氏はほかに塩塚古墳近傍のオセ山古墳と三重県毘沙門塚古墳(名張市)の2基を4区型として例示するが、墳丘の遺存度や測量図の精度から、墳丘プランを正確に判定することが筆者にはできない。

5) 突出部長12単位の古墳

長さ12単位の前方部をもつ古墳としては、京都府神明山古墳(4期。小沢1969)、古市王陵区の野中宮山古墳(5期。上田1989)、奈良県掖上鐘子塚古墳(6期。今尾ほか1986)のように、4、5世紀の畿内やその周辺の大型前方後円墳のほか、栃木県の吾妻岩屋古墳、壬生茶臼山古墳、群馬県の二ツ山1号墳など地方の有力古墳にも多く見られる。これらは前幅も大きく、前方後円墳としてまったく問題ない古墳である。これに対し、幅や高さが小さく、一見して小方部と見まがうような長さ12単位の突出部をもつ古墳は今のところ確認できない。

単位区の4区、4単位区の3区である長さ12単位の前方部をもつ古墳を帆立貝古墳に含めることはきわめて困難である。3単位区の4区あるいは主丘部直径の2分の1以下を帆立貝式として、この数値で墳形の一方向の境界を画すことが適当でないことは明らかであろう。

6) 突出部長10単位の古墳

石部らの分類で4区型の次は3区型の帆立貝形古墳で、24等分値では9単位の長さとなる。例示されたのは5基(大阪府こうじ山・蕃上山・大園、三重県女良塚・馬塚)で、筆者の検討では前4者が8単位または9単位、最後の馬塚古墳だけ10単位の長さをもつ。

三重県馬塚古墳(8期)は、後円部径72歩(98.6m)の規格で、作図によって前方部長10単位、前幅は26単位と捉えられる(図IV-20)。後円部は3段築成で、これに対し前方部は現状で2段しかないが、「前方部が平たいのはそこに寺院があったり運動場にされた為」(三重県教委1970)である。いつのころか、前方部第3段の封土が2段目テラスのレベルまで除去されて平坦な境内地がつくり出されていたらしい。この古墳は本来後円部、前方部とも3段築成の前方後円墳とみて何ら問題ない。造出がくびれ部両側に付設されている点も前方後円墳とする見方の補強材料といえよう。現況の周濠外周プランは、左側は楕形、右側は墳丘相似形と左右で異なっている。右側が本来のプランかとみられるが、いずれにしても側面外周線は前方に向かって大きく開いている。帆立貝古墳には、外周の側縁線が前方に向かって広がっていく周濠をもつものはないようである(後述)。

馬塚古墳を積極的に帆立貝古墳とすべき要素は認められず、逆に前方後円墳に共通する構成要素にはこと欠かない。この古墳の長さ10単位の突出部は前方部といってよいだろう。

栃木県長塚古墳(10期)も、筆者の判定では前方部長10単位である。前幅は32単位もあり、感覚的にもこのような古墳を帆立貝古墳とみることは到底できず、前方後円墳とみて差し支えない古墳といえよう(図X-3)。

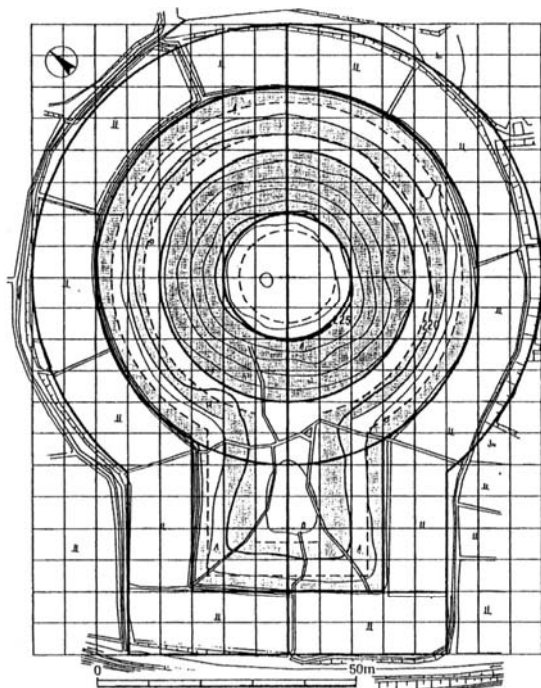
京都府蛭子山古墳(3期。佐藤1992)は、前方部長10単位で、前幅は14単位である。この古墳は比較的古い時期の地方古墳で、前方部前幅も小さいが、後円部、前方部とも3段に築成されており、前方後円墳とみてまったく支障ない(図IV-15)。

以上、わずかな事例での検討であり、長さ10単位の突出部はすべて前方部、その墳形は前方後円墳と一

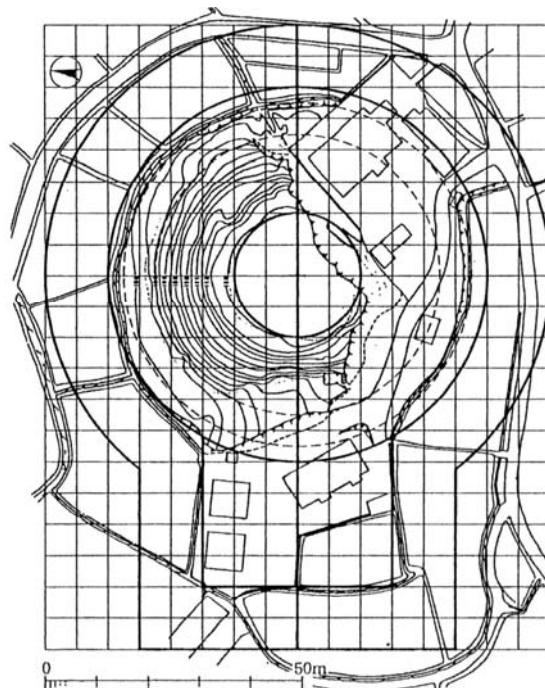
律にみなしてよいかどうか慎重な判断が必要であるが、少なくとも上記の3基については、これを帆立貝古墳とするにはかなり無理があると思われる。

5. 境界領域の帆立貝古墳

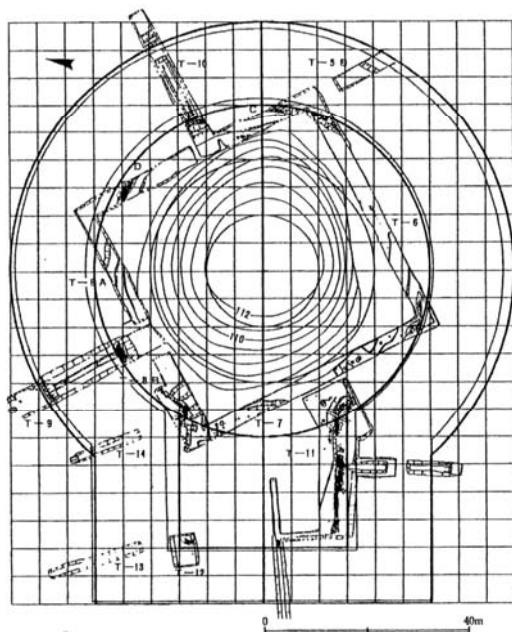
1) 突出部長8単位の古墳



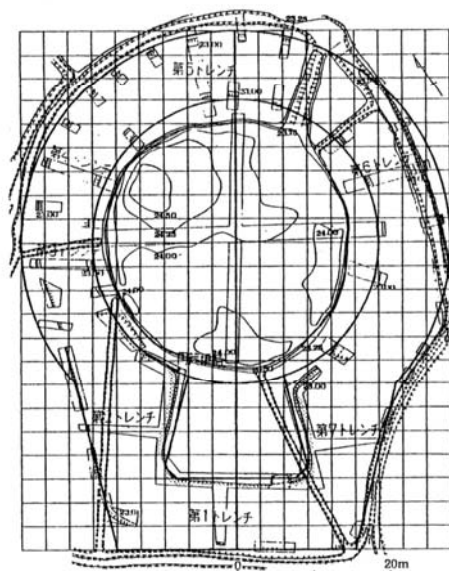
女良塚古墳企画図 (主丘部径 54 歩・74.0m)



椿山古墳企画図 (主丘部径 54 歩・74.0m)



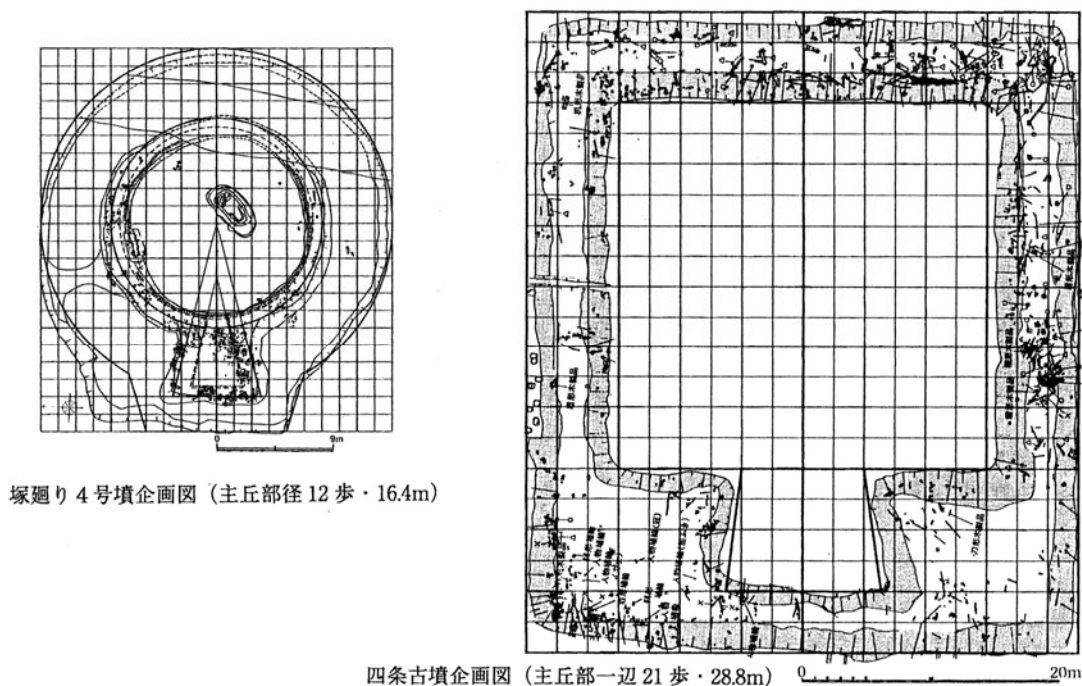
地山古墳企画図 (主丘部径 48 歩・65.8m)



こうじ山古墳企画図 (主丘部径 27 歩・37.0m)

1/1000

図VI-12 突出部長8単位の古墳 (1)



図VI-13 突出部長8単位の古墳 (2)

前節の検討で、突出部長 10 単位以上の古墳について、これを前方後円墳ではないとする積極的要素は認められないことを見た。長さ 4 単位から 6 単位までの突出部をもつ古墳は帆立貝古墳（狭義の帆立貝式古墳）として支障ないと思われ、また、7 単位の古墳は今のところ確認されないので、最終的には突出部長 8 単位および 9 単位の古墳について、それぞれどちらの墳形とみなすのが適当かという判断になる。8 単位は櫃本が境界とした主丘部直径の $\frac{1}{3}$ の長さであり、9 単位は石部らの 3 区型古墳に当たる。

突出部長 8 単位の古墳は比較的少なく、説得性のある企画図を提示できる調査例はかぎられる（図VI - 12, 13）。女良塚古墳は、石部らが 3 区型（9 単位）として例示した 5 基のうちの 1 基である。主丘部径 73m との報告のとおり 54 歩（74.0m）の規格である。主丘部は「二段築成」と報告されているが、現況を確認すると明らかに 3 段築成である。これに対し突出部は 2 段築成で、その墳頂平坦部は主丘部の第 2 テラスに連接する。突出部の墳頂は排水を考慮してかまぼこ状に仕上げられており、さきに見た馬塚古墳とはちがい本来の状態をとどめていることは確実で、主丘部 3 段に対し突出部 2 段という構成は当初からのものと認められる。

女良塚古墳と同じ平面プランをもつ古墳が滋賀県に 2 基存在する。椿山古墳は、女良塚と同じ径 54 歩（74.0m）の規格で、墳裾プランだけを見れば同形同大である。主丘部は 2 段築成、これに対し突出部は 1 段で主丘部のテラス面を超える高さはなかったようである。地山古墳は、女良塚古墳より 1 ランク下の径 48 歩（65.8m）の規格で、墳裾プランは同一、溝幅は異なるようだが墳丘相似形の周溝をもつ点も共通している。

長さ 8 単位、幅 12 単位の長方形小方部をもち、墳丘相似形周溝をもつ古墳が三重、滋賀両県に 3 基確認された。ある時期一個の定式化した平面構成として定着していた可能性が考えられる。

こうじ山古墳の周溝外周プランは、側縁線の途中がくびれる無花果形で、左右で検出状況が異なるが、地目の境界線などを参考に図のように復元した。塚廻り 4 号墳は、径 12 歩（16.4m）という小古墳である

が、全体にかなり厳密に施工されている（以上図VI-12）。

四条古墳は、主丘部が方形の事例である。測量図を見ると主丘部および周溝外周プランは菱形状に歪んでいるが、これはおそらく単純な施工ミスによるとみられる。この時代、直角を求めるのが比較的むずかしい技術であったことは、当時の最高水準の技術で施工されたであろう大王墳クラスの畿内大型前方後円墳においても、前方部前縁線が主軸に直交しない例が見られることから理解される。これに対し4辺の長さの方は、現場用モノサシを使用して正確に設定されているものと思われる。このように考えて、各辺の長さはそのままにして主丘部と周溝外周の四隅を直角に修正して企画図を作成した（図VI-13）。

2) 突出部長9単位の古墳

小方部長5単位の古墳はわずか3基、7単位のものは確認されないように、奇数単位の小方部をもつ帆立貝古墳は例外的な存在であった。これに対し、4, 6, 8の偶数単位の古墳はそれぞれかなり多く確認されている。

前方後円墳と帆立貝古墳の境界がある単位数に設定されたあとは、帆立貝古墳における突出部の長さの調節は、基本的に2単位きざみで行われたとみてよさそうである。長さの設定は、造墓主体者の望みどおりに行われたものではなく、原則的に主丘部規格とともに倭王権によって指定されたと思われるが、2単位きざみの長さ指定が行われていることは、古墳設計の現場で2単位区（12等分値）という大単位が一般的に用いられていたことが反映された事象とみてよいかもしれない。

そのような中で、突出部長9単位の古墳は奇数単位としては例外的に多く確認されている。ここでは4基の企画図を示す(図VI-14)。

大園古墳の墳丘はすべて失われていたが、残存した周溝によって突出部長9単位、前幅16単位と復元した。このプランは、ほかの3基の古墳と同じものである。ただ、側縁線の開き度合いはそれぞれ微妙に異なり、それに応じてくびれ部幅もちがってくる。その程度を確認するために側縁線を主丘部側へ延長し、主軸との交点の位置が異なることを示した⁵⁾。周溝幅はそれぞれ異なるが、周溝外周が馬蹄形プランをもつ点も4者共通している。

蕃上山古墳は損傷が著しく、櫃本は複突出墳とみているが、くびれ部左側の突起は突出部左側縁の攪乱によって二次的に生じたものとみるべきであろう。供養塚古墳⁶⁾は複突出墳であり、くびれ部右側に長さ2単位、幅5単位の造出が派出している。

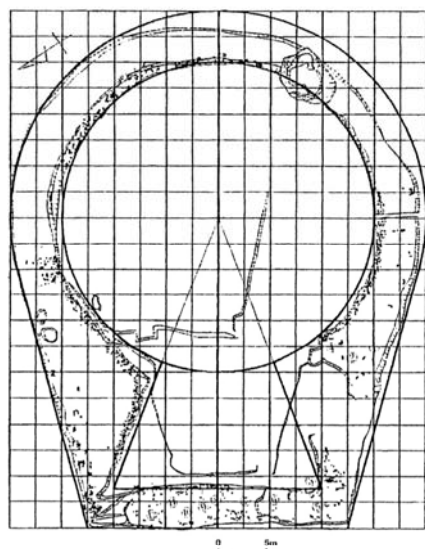
井ノ奥4号墳は2段築成で、主丘部第2段裾の葺石基底石列は円環状に完結せずに突出部に続き、第1段の裾線にほぼ平行して、全体では前方後円形にめぐる。テラス上の埴輪列も本来は同じように墳丘を一周していたものらしい。

以上4基が9単位として確実な事例である（蕃上山が多少不確実であるが）。ほかに兵庫県亀塚古墳（8～9期）が、主丘部径15歩（20.6m）という小規格ながら9単位の事例とみてほぼまちがいない。また、栃木県雀宮牛塚古墳は、主丘部径30歩（41.1m）とみたとき突出部長9単位の可能性があるが、損壊が甚だしい上、部分的なトレンチ発掘のため、確定的とはいえない。

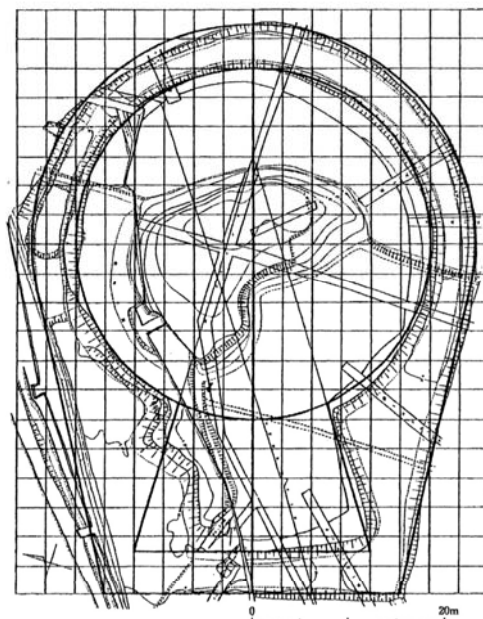
6. 前方後円墳と帆立貝古墳の境界

1) 9単位古墳の位置づけ

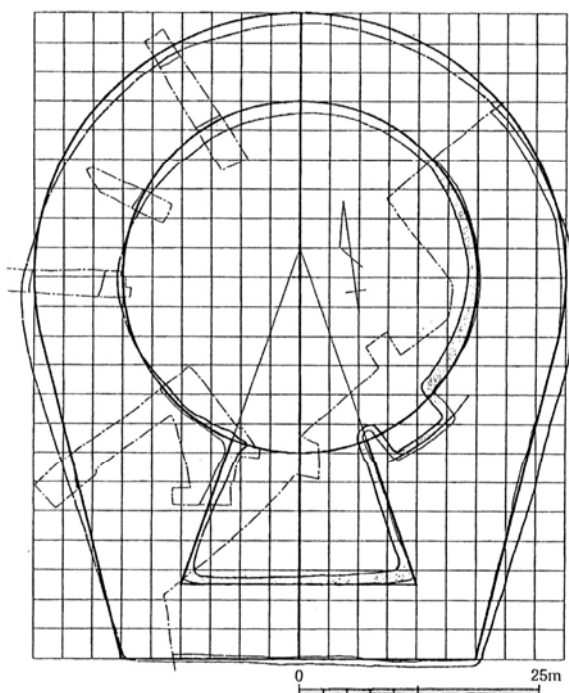
企画図によるこれまでの検討によって、帆立貝古墳と前方後円墳の境界領域には、突出部長8, 9, 10と各単位数の古墳の存在することが確認された。24等分値1単位という最小差をもって各「単位型」が等間隔で並んでいるわけであるが、そのような序列のどこかに、2つの墳形を分ける境界を設定し、そのこと



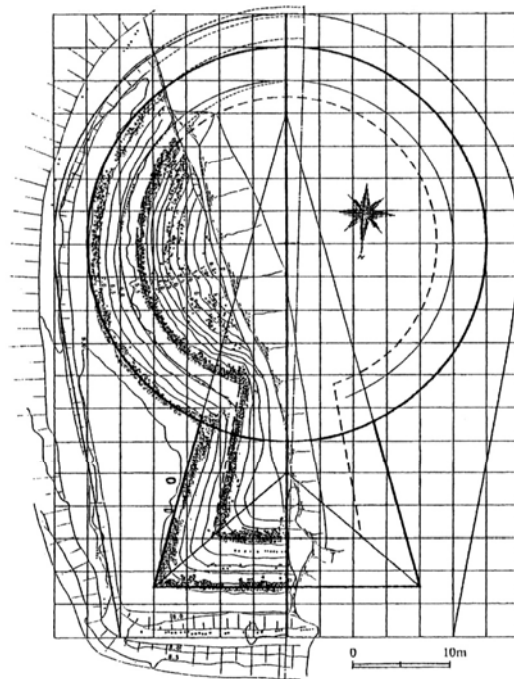
大園古墳企画図（主丘部径 24 歩・32.9m）



蕃上山古墳企画図（主丘部径 27 歩・37.0m）



供養塚古墳企画図（主丘部径 27 歩・37.0m）



井ノ奥 4 号墳企画図（主丘部径 30 歩・41.1m）

図VI-14 突出部長 9 単位 of 古墳

を合理的に説明することは可能なのであろうか

すでに見たように、女良塚古墳や椿山古墳における主丘部と突出部との高さ（段数）の関係などから、突出部長 8 単位の古墳は帆立貝古墳の範疇に含ませて支障ないと思われる。同じく馬塚古墳など 10 単位の古墳も前方後円墳とみて何ら問題ないと考えられるので、最終的には 9 単位の古墳がどちらの墳形に帰属

するかという検討作業によってこの問題は決着されることになる。

墳丘の立体的構成 帆立貝古墳の判定に際し主丘部、突出部の高さの関係は大きな判定要素となる。9単位と確認された企画図掲載の4基のうち、3基については残念ながら墳丘が失われていて当初の立体的構成が不明である。

唯一当初の状態を把握できる井ノ奥4号墳は、主丘部、突出部とも2段築成で、中段テラスとそこに樹立された埴輪列は前方後円形に一周していたとみられる。第2段裾の葺石基底石列も同様に、これは通常の前方後円墳と何ら異ならない立体構成といってよい。主丘部が女良塚のように3段になっていた形跡も認められないので、突出部の高さが主丘部中段テラス面までにおさえられた帆立貝古墳とは異なる様相を示していることを認めざるをえない。

この古墳の立体的構成は前方後円墳にふさわしいものといえ、この点は9単位型の古墳を前方後円墳とする見方の支持材料となる。

埴輪列 円筒埴輪列が墳丘をどのように囲繞しているかという点も、墳形判定の大きな要素になると思われる。

墳丘中段の埴輪列について遊佐和敏は、「帆立貝式前方後円墳」では「円丘部と方形部を一連の墳丘として認識し、段築テラス面上を前方後円形にめぐらされるのが普通であった」のに対し、「造り出し付き円墳」の場合は、「墳丘としての円丘部と付属施設である方形部を区別する意図から、接続部にも円筒埴輪が配列されることがあった」と、2つの墳形における大きな相違点として指摘した(遊佐 1988 : P45)(傍点は引用者)。優れた着眼であるが、埴形の捉え方が筆者とは異なるためこの問題についても結論は異なる。

遊佐の規定する2種の埴輪列囲繞形態のうち、前者は「帆立貝式」ではない通常の前方後円墳に相応したものとみななければならない。

埴輪列が円環状に完結する後者の形態のうち、「付属施設である方形部を区別する意図」から、そのように配列されたものが造出付円墳にかざられる点について異論はない。ただし、帆立貝古墳にも塚廻り4号墳のように埴輪列が円環状に完周するものは多い。後者の形態は、造出付円墳だけでなく帆立貝古墳にも通有の囲繞形態と捉えるべきである。

円丘部と不可分の小方部をもつ帆立貝古墳という墳形において、接続部で埴輪列が途切れずに円環状に一周するものが多いのは、小方部を付属施設として区別するためではなく、帆立貝古墳の立体的構成が、基本的に小方部の高さを主丘部の中段テラス面までとするものであったため、前方後円墳とはちがいで埴輪列を円環状に完周させることに支障がなかったためと解しておけばよいと思われる。埋葬主体部を包蔵する主丘部の禁忌性を高めるために埴輪列を円環状に囲繞させることは、前方後円墳の最上段においてもしばしば認められることである。

埼玉県雷電山古墳など若干の例外はあるものの、以上見たように帆立貝古墳の埴輪列は主丘部(の中段)を円環状に取り巻くのが基本であり、前方後円形にめぐるのは通常の前方後円墳だとすると、井ノ奥4号墳の墳丘中段埴輪列の状況は、帆立貝古墳ではなく前方後円墳としての条件をそなえていることを否定できない。

造出 供養塚古墳は複突出墳で、長さ2単位の小突出部すなわち造出をもつ。造出はくびれ部右側の主丘部から派出し、大突出部に接していない。造出をとまなう帆立貝古墳においては、造出は例外なく小方部から離れた位置にあり、両者が部分的にでも接することはない。

これに対し、前方後円墳における造出は、大分県下山古墳(菊田 1985)など小数の例外をのぞいてくびれ部に置かれ、全部か部分的にかのちがいはあるものの、必ず前方部側縁の墳麓斜面に接するように設置

表VI-2 小方部の平面規模比較表

* 数字は単位数

長さ	幅	古墳名
4	5	月の輪
	6	天乞山〔方〕, (静岡・千人塚)
	8	久保田山, 高崎情報団地16号, 御塚
	10	池上, 笹塚
	12	乙女山, 雷電山
	16	栃木・久部愛宕塚
5	8	野毛大塚, 樋渡
	12	磯崎東1号
6	8	高塚1号
	10	楯塚, 舞台1号, 狛江亀塚, 明合〔方〕
	12	神前山1号, 若宮八幡北, 御願塚, 鞍塚, 雨宮
	13	小立
	20	赤堀茶臼山
8	10	塚廻り4号, 四條〔方〕
	12	女良塚, 椿山, こうじ山, 地山
	22	(埼玉・お手長山)
9	16	大園, 蕃上山, 供養塚, 井ノ奥4号

() 付きの古墳は企画図を掲示していない古墳。

されている。供養塚の場合、大突出部の側縁線はかなり長く、ここから造出を派出することは十分可能であるにもかかわらず、そのように施工されていない。この点は帆立貝古墳における基本的企画性の規範に則っているといつてよい。

突出部の前幅 帆立貝古墳という新たな墳形の創出に際しては、突出部の長さ、高さとともに、幅についても一定の限度を設け、前方後円墳との差別化が図られた可能性が高い。表VI-2に突出部長と前幅の関係を示した。参考のために、諸般の事情で企画図を掲示しなかった古墳のうち、長さ、幅とも確実に把握できているものも取りあげた。

長8単位以下の古墳を見ると、長6単位の群馬県赤堀茶臼山古墳の前幅20単位という例のほか、長4単位に幅16単位の栃木県久部愛宕塚古墳、長8単位に幅22単位の埼玉県お手長山古墳(鳥羽ほか2005)という非常に幅広い古墳が認められる。いずれも東国という辺境地の事例であり、後2者は6世紀後半の築造と推定されるので、帆立貝古墳に関する規範がゆるんだ段階の所産といえるかもしれない。群馬、栃木両県にはこの時期、突出部の非常に幅広い帆立貝古墳が多数存在するようであり一つの地域性とも捉えられる⁷⁾。このような例外的な事例をのぞくと、長8単位以下では幅12単位がほぼ上限となっているとみて誤りないと思われる。長9単位の大園古墳など4基の突出部前幅はいずれも16単位で、墳裾の輪郭線だけを捉えればほとんど同一プランの古墳といつてよい。16単位という幅は、長8単位以下の帆立貝古墳における原則12単位以下という規模の設定をこえるものであり、その4単位という差をどのように評価すべきか問題となる。

16単位という突出部の幅は、そのことから帆立貝古墳には含みえないとするに足る決定的要素ではないともみられるが、4単位の差はかなり大きいこともたしかである。ただ、前方部長10単位の前方後円墳、馬塚古墳の26単位、長塚古墳の32単位に比べればその差は歴然としている。16単位という幅は、長8単位以下の帆立貝古墳とは異なる墳形とするだけの決定的差異ではない、とみておくのが妥当といえるだろう。

周溝(濠)プラン 造出付円墳を含む帆立貝式古墳の周溝の外周形態は、例外的なものをのぞけば表VI-3および図VI-15のとおり6種類に大別される。このうち①と⑥の2種は帆立貝式古墳に特有のプランである。

表VI-3 帆立貝式古墳・周溝プラン分類表

時期 プラン	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期
①倒卵形	6 楯塚	5 野毛大塚 5 樋渡	6 鞍塚	4 高崎情報団 地16号		6 若宮八幡北	
②馬蹄形		4 乙女山 4 池上	6 舞台1号	6 御願塚 9 供養塚 9 井ノ奥4号	9 大園 9 蕃上山		
③相似形		4 雷電山 8 女良塚 8 地山	8 椿山				
④無花果形			2 三吉石塚 8 こうじ山			4 御塚 8 塚廻り4号	
⑤楯形				6 小立			
⑥眼球形			2 後野円山 2 公卿塚	4 久保田山	6 狛江亀塚		

古墳名頭の数字は突出部長の単位数

②～⑤の4種は前方後円墳にも認められる。

①の倒卵形（卵円形）は全周が曲線で構成されるもので、東京都野毛大塚古墳や群馬県若宮八幡北古墳などで詳しく検討したように、中心も半径も異なる4種の円弧をなめらかに接続させることによって形成される。集成編年4期の大阪・盾塚でいち早く採用されており、今のところ②以下のタイプの初現期が5期以降と若干遅れることからみて、帆立貝古墳の周溝形態として最も早く採用されたものである可能性が高い。

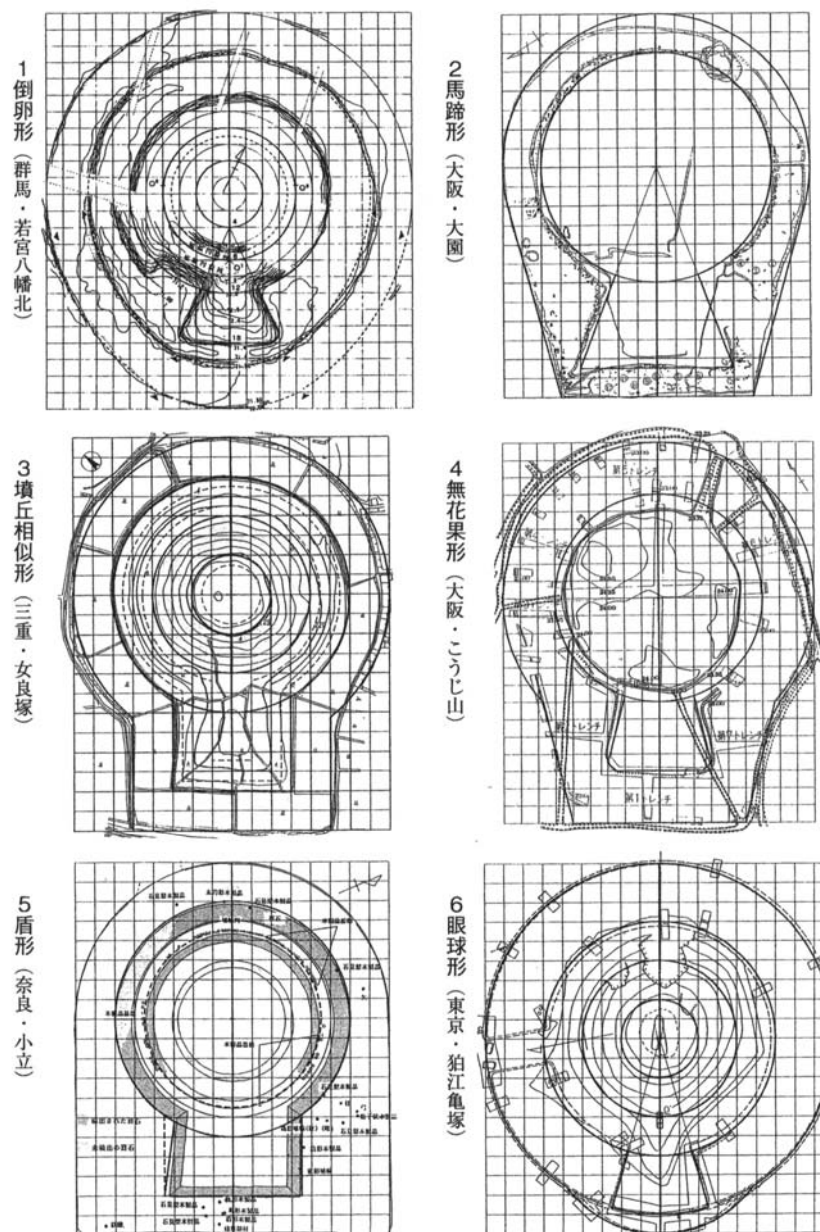
初出の時期および前方後円墳には認められない独自のタイプであることに着目すれば、帆立貝古墳という墳形が創出された際、新墳形にふさわしい周溝プランとして創案された形態である可能性も高いと思われる。企画図未掲載の古墳で倒卵形周溝をもつものとして大阪府青山古墳（6期。山田1993）、岡山県井口車塚古墳（8期か。小郷1994）などがあげられ、馬蹄形に次いで採用数の多いプランだったと推定される。

②の馬蹄形は5期に出現する。その後も長く採用され、帆立貝古墳の周溝プランとしては最も採用数の多いものとなっている。突出部の小さい墳形にふさわしいプランであり、盾形や眼球形に比べ周溝の面積は多少小さくて済む。また、倒卵形に比べ設計、施工が格段に容易であり、この点も広く採用された要因になっているものと思われる（企画図の作成も比較にならないほどたやすい）。これらのことから比較的早く倒卵形に代わって主流の座を占めることになったものと推察される⁸⁾。

前方後円墳に共通する②～⑤のプランは、形式的には墳丘相似形→無花果形→馬蹄形→盾形という発展系列として把握できるが、帆立貝古墳における採用実績はそのような時間差を示さず、あまり時間を置かないですべてのタイプが登場するとみてよさそうである。すでに前方後円墳の周溝プランとして各タイプが出そろった段階で、帆立貝古墳という墳形が成立したという事情によるものと思われる。

③の墳丘相似形は、埼玉県雷電山古墳（突出部長4単位、5期）をのぞくと近畿地方東部（滋賀県と三重県）に3基が確認され、時期的、地域的にやや偏った存在状況を示す。3基が8単位長の古墳である点にも注意されるが、歴史的背景などの考察については類例の増加を待たなければならない。

④無花果形、⑤盾形の類例も少なく、今回企画図を掲載できなかった事例の中にも追加例はほとんどない。馬蹄形に比べ存在数は格段に少ないものだったとみてよいだろう。



図VI-15 帆立貝古墳周溝プラン分類図

⑥の眼球形は初現が6期とやや遅れ、この期の2基はどちらも突出部長2単位の事例であることから、当初は造出付円墳のための周溝プランとして成立し、やがて帆立貝古墳にも採用されるようになったものと考えられる。

このように見てくると、少ない事例からではあるが、帆立貝古墳における6種の周溝外周プランのうち、帆立貝古墳に特有の形態である倒卵形が最初に出現したこと、ただし最も広く採用されたのは馬蹄形であったこと、の2点はまちがいない事実と認められる。

また、どのタイプも周溝外周の最大幅は主丘部中心点の左右にあって、前方へ向かって幅のせばまるプランをもつ点も注意すべきであろう。盾形に分類した小立古墳も、その側縁線は主軸に平行して、前方へ向かって広がることはない⁹⁾。

5期以降の大型前方後円墳の場合、周濠外周の側縁線は前方へ向かって大きく開くものがほとんどで、この点著しい相違点といえるが、突出部の規模に制約を加えられた帆立貝古墳という墳形に相応した状況といえることができる。周溝外周の平面形態にはいくつか選択の余地があったが、いずれの場合も前方へ向かって広がるプランは容認されなかった可能性は高い。

したがって、9単位型の古墳がすべて馬蹄形プランをもつことは、これを帆立貝古墳の範疇内にあるとする有力な根拠になるものと思われる。

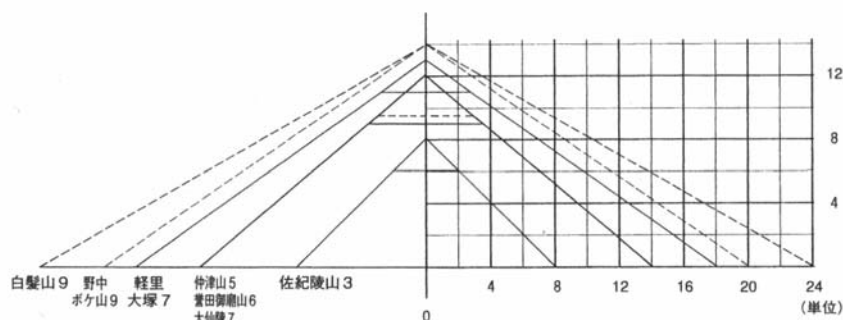
2) 帆立貝古墳の範囲

9単位型古墳の帰属について検討した結果、突出部の幅、周溝形態という2つの面で、帆立貝古墳に含めることを支持する材料が得られた。滋賀県供養塚古墳における小突出部（＝造出）の付設位置も補強材料とみなしうる。

ただ、前方後円墳と帆立貝古墳との区別に関して有力な指標になる主丘部と突出部の高さの関係（＝立体的構成）については、墳丘の遺存度の問題から島根県井ノ奥4号墳しか確認できなかった。この古墳では主丘部2段に対し突出部も2段、中段テラスおよび樹立された円筒埴輪列は前方後円形に一周し、前方後円墳とみて問題ない構成を示していた。

以上を総合して判断すると、井ノ奥4号墳という否定的材料は存在するものの、現状では突出部長9単位の古墳は帆立貝古墳に含まれると結論するのが妥当であるように思われる。

単位数で確認された突出部の平面規模が同時期の前方後円墳にくらべれば格段に小さいこと、および平面プラン策定上何らかの制約が存在したことを物語るかのような周溝外周プランの状況は、8単位型以下の帆立貝古墳と異ならない企画性とみて何ら差し支えないものと考えられる。



図VI-16 前方部前面の平面プラン比較図（古墳名横の数字は推定時期）

3) 前方部の発達という現象

5世紀以降の大型前方後円墳においては前方部の発達が著しい。長さ、幅とも次第に大きくなり、その状況は24等分値の単位数で明確にたどることができる。一般には前方部の長さ、幅の増大と捉えられる現象は、実は二次的なもので、前方部肥大化の真の原因は、前方部の高さをできるだけ高くしたいという造墓主体者の希求にあった。

5、6世紀を通じてなぜそのような欲求が持続されたのかよくわからないが、時代を追って前方部の高さが増大していく状況があることは否定できない。平面規模を一定にして高さだけを高くすると、斜面の傾斜（ノリ勾配）がきつくなり、斜面崩壊の原因となる。安定した墳丘構造を得るため、高さを増すときは同時に斜面幅を大きくして、平均勾配を一定に保つ必要がある。

前方部前面については、墳丘最上段の肩の線が中軸線と交わる点をKとすると、墳裾の点Dとの間の水

平距離 KD が前面の総斜面幅ということになる。KD は時代を追って長くなっていくので、前方部の高さの増大に対応して、斜面幅も大きく設定されていることは明らかである（図VI-16）。

前方部の側縁部についても同様に斜面幅を広げなければならないが、この場合は左右両側の斜面幅を広げなければならない、また墳頂平坦面の幅も確保しなければならないので、両隅角間の距離 QQ は大きく広げられることとなる。このように、盛土工事における技術的必要性から、高さを大きくしたいという注文に対応して、同時に長さ、幅とも次第に大きくなっていったというのが前方後円墳における前方部の発達という事象の実態であった⁹⁾。

5, 6 世紀の前方後円墳の築造企画にこのような法則性があることを認めるとき、8 単位型以下の帆立貝古墳における墳丘の立体的構成は、同時代の前方後円墳からはあまりにもかけ離れた、まったく異質のものといってよい。9 単位型についても同時代の前方後円墳からの懸隔は甚だしい。

古墳の築造に際しては、倭王権から墳形と主丘部規格が指定され、前方後円墳の場合は墳長についても指定されたと考えている。

指定値の範囲で前方部の高さをできるだけ高くしたいという要求に応えるとき、主丘部規格に比して墳長の指定値が短い場合は、奈良県掖上鐘子塚古墳や三重県馬塚古墳のように、幅にくらべて寸詰まりな印象のある不自然な前方部プランとならざるをえない。野中ボケ山古墳（現・仁賢天皇陵）や白髪山古墳（現・清寧天皇陵）になると、もはや破綻寸前といってよいほど不自然なプロポーシオンとなっているが、これも指定された墳長の範囲内で前方部を高めようとしたための結果とみてよい¹⁰⁾。

墳長の制限には、被葬者に対する倭王権からの何らかの意思表示がこめられていたはずであるが、前方後円墳においては、指定値の中で自由に前方部を高くし、そのために幅を大きくとることも許容されていたことが理解される。墳丘の立体的構成に関する王権からの干渉の度合いは、帆立貝古墳とは著しく異なり、2つの墳形における決定的ちがいとして特筆される。

4) 小方部長の上限は9単位

唯一立体的構成の知られる井ノ奥4号墳が前方後円墳と異ならない構成をもつものであったため説得性に欠ける点是否めないが、突出部長9単位の立体的構成も、基本的に8単位以下と異ならないものであった可能性は高い。最終的には墳丘構成を確認できる資料の追加を待たなければならないが、井ノ奥4号墳の立体構成は、当面、例外的なものとみる立場をとりたい。

長々と説明してきたが、帆立貝古墳としての小方部長の上限は9単位であることを確認した。この長さは、大単位でみれば3単位区の3区に当たる。10単位以上が前方後円墳となるが、この数値は3単位区、4単位区では整数の区数にならず、あえて当てはめれば2単位区の5区ということになる。

こうしてみると、帆立貝古墳と前方後円墳との境界設定には3単位区という概略設計単位が用いられ、その3区以下を前者の墳形における突出部長の上限とするという規範が存在したと結論される。造出の長さの上限が、3単位区の1区と定められていたことと対応する事象とみてよいであろう。